然しながら、其當時陸奥の敵軍は勢が中々盛んで、顯家卿は、今までの居城であつた、陸奥多賀の國府も維持することが出來ず、延元二年正月八日には、義良親王を奉じて、結城宗廣と共に、伊達郡の靈山城に遷らなければならなかつた位ですから、到底西上の機會を見出す事は出來ませんでした。

其後宇都宮に據つてゐた官軍が、靈山に到つて顯家卿を援けましたために、官軍は幸にも再び勢力を盛返し、奥羽の賊徒を平定する事が出來ましたために、九月顯家卿は愈々大擧西上の途に上られました。

卽ち義良親王を奉じて、結城宗廣、伊達行朝等と共に、靈山を發して、白河關を越え、途中の敵軍を討從えながら宇都宮に攻め入りました。

足利義詮は顯家の西上と聞いて大いに驚き、兵を利根川に出しましたが、打破られて武藏の府中に入り、遂に關東の根據地たる鎌倉をも陷しいれられて、義詮は三浦に逃れるといふ有樣で、奥羽官軍の武威は關八州を風靡してしまひました。

延元三年春正月になりますと、顯家卿は大軍を率ゐて鎌倉を出發し、東海道を西上しました。

此時宗良親王は遠江より此軍に御參加になる等益々勢力を增して、美濃路に差し懸つたのであります。

尊氏は大いに驚いて、足利直義、高師冬等をして之を拒がしめ、一方上杉憲顯、桃井直常等も官軍の後を追ふて美濃路に迫り、兩軍は青野原に於て大いに戰ひましたが、官軍は前後に敵を受けたために、殘念にも顯家卿は足利方に拒まれて一歩も進むことが出來ず、垂井から迂廻して伊勢路に出で、雲出川、櫛田川に賊と戰つて、伊賀を經て大和に入り、奈良に到着したのは實に二十一日でありました。

斯くして上洛の道を開いたとは申しますけれども、青野原以來度々の合戰に利を失ひ、此のまゝに吉野に入るといふ事は、如何にも言甲斐のないことであると、結城宗廣の謀によつて、一擧京都を衝かんとしましたが、桃井直常、同直信のために、

亦もや、般若坂に打破られて、顯家卿は河内に逃れ、義良親王は吉野にお入りになりました。

〔二〕北畠顯家卿の戰死

河内に逃れた北畠顯家卿は、三月八日に河内の石川河原で戰ひました。

こうした所へ弟の顯信卿は此度奈良の方面から、敗軍を纏めて北上し、男山に陣を取つて其の勢の盛なることは、京都を一呑みにするやうでありました。

尊氏の命をうけた高師直は、一族を擧げて之を攻めました。

見渡せば、男山山麓一帶の地は輪違ひの旗を吹き靡かした寄手の兵が尺地も殘さず充滿て居ります。

けれ共顯信卿の立籠つた城は實に要害の堀がきびしくて、猛卒が悉く心を同ふして居りますから、寄手は何時も攻める度に擊退されてしまひます。

斯くて師直は、

『和泉河内の邊は敵の勢力のある所であるから、勢のある强敵が、若しも其中に起れば、必ず和田、楠木も其に力を合して手向ふに違ひない。

是はどうしても、未だ敵の弱い中に退治して置かないと、必ず後が恐ろしいことになるであらう。』

と、男山には大兵を差し向けて置いて、敵の打出る事の出來ないやうに四方を固め、師直自らは天王寺に向つて出發いたしました。

延元二年三月十五日、師直の軍が攝津の渡邊橋まで來ると、顯家卿は同じく河内から出陣して來て、丁度此地で遭遇してしまひましたので、淀川を挾んで、互に喚き叫んで攻め戰ひました。

然し官軍の方が遂に叶はなかつたのでせうか、顯家卿は南を指して颯と退いてしま

ひました。

明くれば、十六日、官軍は天王寺まで遁げましたから、師直の軍勢は之を追ふてまた此處で戰ひました。

けれども官軍の方はとかく渉々しくありません。またもや南の方、阿部野まで退いて此處に踏止ることになりました。

阿部野は大阪市の南、天王寺と住吉との中程の所です。

東は遙かに河内平野を隔てゝ葛城の連山を望み、西は遠く茅渟海を隔てゝ、鐵拐、摩耶の麓、湊川の古戰場を髣髴の間に見る事の出來る所です。

渡邊橋（今の大坂天神橋）から天王寺迄凡二十五町、天王寺から阿部野を經て住吉に至る凡一里、住吉から堺浦に至る凡三十町、堺浦から石津に至る凡一里、之等は何れも大坂より紀州に至る街道にあたつてゐて、顯家卿の轉戰したのは實にこの數里の間でありました。

斯くて兩軍の間に交はされた、激しい矢叫びの音に戰の幕は切つて落され、東より西に、南より北に追ひつ追はれつする軍馬のために、砂塵は蒙々として空を蔽ひ、大地も搖れ動く程でありました。

けれども顯家の兵は、是迄度々の合戰に疲れ果てゝ居るばかりでなく、其の上小勢でしたから、どうして師直の新手の大勢に勝つことが出來ませう。

『身命を捨てゝ奮ひ戰へ』

と、言ひましても、段々追ひ捲くらるゝのみで、遂には散々ばら〳〵になつてしまひました。

斯ふなつては施方もありません。大將の顯家卿も吉野へ參らうと志して、南へ退いてしまひました。

それから暫く四ヶ月許りの間は、顯家卿も殆ど勢を失つて居りましたが、其の中に追々と忠義の兵も集り、吉野よりも加勢の武士達が參りましたから、再びこゝに

勢を得て、捲土重來の勢で、五月六日には堺浦に討入つて、四邊の民家を燒拂つてしまひました。

此日男山にも合戰がありまして、官軍の兵士は夥しく戰死しました。

八日には師直は、

『今度こそ顯家を討ち取つてしまはう。』

と、出掛けて參りまして、天王寺に陣を取りました。

二十二日顯家卿は堺浦に討つて出て、師直師冬の軍と激しい戰ひを始めました。

官軍は海陸兩方面から、死力を盡して敵を攻めましたために、師直方は大いに腦まされましたが、其の中に官軍の船は六艘までも燒き沈められて、官軍は益々弱つてしまひました。

斯くて諸方の官軍が段々に追ひ捲られて、遂に顯家卿も石津に遁れて流矢にあたつて、討死してしまひました。

男山を攻めてゐる賊軍では、

『北國から脇屋義助が、男山救援のために、近く都に上つてくる。』

といふ噂を耳にしましたから、

『若しも、そんな事が眞と成つては、それこそ由々敷天下の大事である。』

と、師直は或日の夜、激しい風雨にまぎれて思ひ切つて神殿に火をかけてしまひました。

男山八幡宮は忝けなくも皇城鎭護の尊い御社で、特に源氏は祖先以來崇敬の神樣でありますから、如何に大義を辨へない師直でも、まさかに此お社に火をかけるやうな亂暴はしまいと、官軍が油斷して居りましたために、城中はすつかり、周章てゝしまつて、折からの風に煽られて赤々と燃える火の下に、逃場を失つて燒き盡さるゝ者は幾人あるか知れません。

この有樣を見た寄手は、四方の谷々から攻め上りましたが、官軍も必死となつて、

三方の嶮岨に據つて防ぎ戰ひましたから、容易に陷すことは出來ませんでしたが、遂に火は社頭に山と積んであつた兵糧を悉く燒いてしまひましたために、顯信卿も今は是までと、已むなく男山を捨てゝ河内に歸りました。

此時男山の城が今四五日も持ち耐えて、北國の軍勢が都に攻め上る事が出來ましたならば、それこそ京都は只一戰の中に攻め落す事が出來たでありませうに、それの成らなかつたのは、返す〳〵も殘念と申すより外ありません。

〔三〕遠州灘の御遭難

後醍醐天皇が延元元年十一月、吉野の里にお遷りになりましてからこの方、美しい吉野山の櫻は、二度までも咲き綻びて自然の春を迎えましたけれども、哀しいことには御聖運は開け給はず、天下の春は容易に廻つて參りません。二度目の花も散り果てたその年の五月雨の頃には、吉野朝廷の力と頼まるゝ顯家卿の戰死、七月には男山の陷落、其の翌閏七月には新田義貞の戰死と、それからそれへと續いて、實にや天皇には、この痛ましい悲報を聞し召されては、如何ばかり大御心を惱し奉つられたことでございませう。

思ふに延元三年は實に吉野を中心として、皇權恢復のために、各地の官軍が捲土重來の意氣を以て一大活動を卷き起し、一擧京都を乘取らうとする、痛快な計畫の建てられた年でありましたが、不思議にもそれが悉く裏切られて哀れ果敢なく破れたといふ事は、如何に吉野朝の人々に取つては殘念なことでありましたでせう、想ふても心が痛みます。

けれども御英邁なる天皇には、かゝる悲壯の中にあらせられましても、かねての御宿願をお果しにならうとする御意氣込には少しもお變りなく、南風競はざる中にも、君臣力を協はせて、この否運を挽回しやうとお努めになりました。

そこで更に北畠顯家卿の弟顯信卿を、近衞中將に任じ、從三位に叙し、陸奥介鎭守府將軍に任じて、父の親房卿と共に、御年十一歳にあらせらるゝ義良親王を奉じて、此度またもや、奥州鎭撫の大使命を果すべく、お命じになりました。

そして此時には奥州白河の城主で、吉野朝忠臣の元勳とも仰がるゝ、結城宗廣も御供申上げました。

是は全く吉野朝廷が、暫く京都恢復の策を捨てゝ、先づ東國陸奥に主力を注いで、足利氏の根據地を絶滅せしめ、徐ろに朝權の恢復を計らうとの遠大な御抱負であつたのであります。

是と同時に宗良親王には遠江を、花園宮には四國を、懷良親王には鎭西を御平定になるやうにそれ〴〵御任命がありました。

延元三年閏七月二十五日、義良親王は、北畠顯信卿及其の父親房卿を從へて伊勢にお下りになり途すがら皇大神宮を御參拜になつては、大命成就の御祈願を遊ばされました。

當時陸奥へ下るのに、陸路をお進みになるといふ事は、到る處に朝敵の蔓つて居りますために、到底出來る事ではありませんでしたから、已むなく九月の始め、兵船五百餘艘を率ゐて、伊勢國の大湊から纜をお解きになりました。

斯くして船が大湊の港を出帆しました頃には、海上は極めて穩かで、五百餘艘の軍船は、宮の御座船を中心にして、順風に帆を孕ませながら、東へ〴〵と、いとも靜かな航海を續けて居りました。

然し陰暦八月と申せば、時は既に今日でいふ所の恐ろしい颱風の季節に入つて居りまして、日本の沿海は一年中で最も海上の荒れ狂ふ時になつて居ります。

大湊を立つてから既に十日も經つた時であつたでありませうか。

船が一大難所とされてゐる、彼の遠州灘にさしかゝつた頃であつたでせう。

雨氣を帶びた東南の風が物凄く檣をかすめて、恐しい山の様な荒波が舷を打つ

様になりますと、海上は忽ちにして物凄い景色に變つてしまひました。

荒れ狂ふ怒濤は五百幾艘の船を木葉の如くに弄んで、檣は折れる揖は流される、唯一同は神に祈り、佛に願つて、ひたすらに風の靜まるを待つ有様でした。

然し荒れ狂ふ風は何時止むとも見えません。

大方は覆沒の運命に會つたものですか、影も形もありません。

幸に免れた船は散々ばらに〳〵なつて、風のまに〳〵、或は伊豆の大島に、或は相模の三浦、由比ヶ濱にと、到る所の津々浦々に吹き寄せられてしまひました。

義良親王を始め奉り、顯信卿、結城宗廣の御乘船一艘も、漫々たる大洋に放たれて、今にも覆る所でしたが、天祐か神助か、辛ふじて伊勢の篠島に吹き戻されて、危い所をお脱れになり、目出度吉野にお歸りになりました。

宗良親王の御召船は、遠江の城輪の湊に着いて、宮様は井伊谷城にお入りになりました。

北畠親房卿の船は、常陸の東條浦に吹き寄せられました。

結城宗廣は伊勢の安濃津に漂着して暫く滯在して居りましたが、其の後久しからずして病に罹り遂に癒えません。

遙に手紙を白河にある、其の子の親朝の許に送りまして、

『自分は齡が既に七旬に及んでゐるが、今生に於て思ひ殘すことは更にない。唯一つ未だ朝敵を滅す事が出來ずして、空しく黄泉の客となるといふ事は、實に自分にとつては、忘るゝ事の出來ない永久の怨であつて、死に勝る苦痛である。若しも汝が我が後生を吊ふと思ふならば、花を手向け、水を汲んで佛の供養をしてはならない。

經を讀み、香を焚くやうな事は尚更必要がない。

唯々朝敵の首を取つて我が墓前に懸けてくれ。』

といふ、實に悲壯な言葉を最後の遺訓として刀を拔いて逆手に持ち、切齒憤慨して

死んでしまひました。

實に壯烈な最後ではありませんか。

然しながら此後親朝は、北畠親房卿が、或は諭し、或は賺し、或は慰めて、王事に盡くす事を勸めましたがどうしても聞入れません。

遂に親朝は、上は後醍醐天皇の御遺詔に背き、下は乃父の遺訓を捨てゝ、斯くまで熱心な親房卿の懇請をも、斥けて、賊軍のため味方してしまひました。

眞に光榮ある結城氏の名譽のために、千載の恨事と申さねばなりません。

第九篇　後醍醐天皇の崩御

〔一〕　塔尾の陵

みよし野の山櫻は、來る春毎に咲き亂れて、我が世の春を祝福して居りますが、賊徒平定のために日夜大御心を碎かせられてゐらせらるゝ天子樣には、花を愛でさせらるゝお暇とてもありません。

月日の立つのは眞に早く、天子樣がこの吉野山に御遷幸になつて以來既に四年、一意天下の御恢復を御軫念遊ばされましたが、御聖運未だ開け給はず、柱石と賴ませらるゝ北畠顯家卿、新田義貞、相次いで討死し、奥羽平定のためにお遣しになつた軍船は、途中颶風のために妨げられて、其の目的を果さず、お側に奉仕した吉田定房

の如き、參議坊門清忠の如き、重臣の公卿も追々亡りますので、眞に吉野朝廷の御有様は、孤影落日のやうな有様でありました。

ことゝはむ人さへまれになりにけり
我世の末のほどぞしらるゝ

とは當時の御製でありますが、眞に拜誦するだに、御淋しき御心の中を拜察して、唯々感涙に咽ばずには居られません。

延元四年三月伊勢よりお歸りになりました義良親王を立てゝ皇太子となさいましたが、斯くして春を過ぎ、夏も暮れ、秋も闌なる八月の九日頃より、天子様には御惱重らせ給ひまして、御枕さえもお上げになりません。

お側にお仕へ申す人々の驚きはどんなでございましたでせう。

日頃は御剛毅の御性質でゐらせられましても、永い間の御心勞が、一時に御發しになつたのでございませうか。名醫の靈藥も、神佛の祈禱も更に其の驗なく、御病勢は日々に重らせ給ふばかりであります。

『朝敵を悉く亡して、天下を泰平ならしめん事は朕の宿願である。

たとひ屍は、南山の苔の下に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望むであらう。

若し朕が命に背き、義を輕んずるならば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず。』

との御遺詔を賜はりまして、左の御手に法華經の五の卷をお持ちになり、右の御手には御劍を按じて、八月十六日の丑刻、寶算五十二歳を以て、吉野の行宮に神去り給ひました。

天皇の、飽迄も逆賊を亡ぼさねばならんとの、不撓不屈の御精神は、眞に五百年後の今日、私共に生々として迫つて來るのでありまして、誰かその御壯烈なる御心事に感泣しない者がありませう。

後醍醐天皇は稀に見る御英邁の君にましまして、眞に日本の尊い國體の上から考え

ましても、最も正しき道理に背いた所の武家政治を根底より破壞して、皇家中興の大業を建設せらるゝのが、實に天皇の一大御理想であらせられたのであります。

この御理想實現の御爲めには、幾度か王城の外に、あらゆる御辛苦を嘗めさせられ、護良、宗良、懷良の三親王を始め奉り、幾多の親王も亦、御父君を輔け參らせて、皇權恢復の第一線に、花々しい御活躍を遊ばされましたが、あはれ天運未だ廻り合はさなかつたためでせうか、御理想の實現も成らず、皇軍甚だ競はざる時に際して、遂に南山雲深き所に玉骨を埋め給はれたのでありました。

斯かる中にあらせられましても、天皇は終始私共萬民の上を御軫念くださいまして、

世治り民安かれと祈るこそ、
わが身につきぬ思なりけれ

と仰せられました。

誠に有り難い極みではありませんか。

この大御心こそは、實に建國以來三千年、我が皇室を通して流るゝ、偉大なる一大御精神なのであります。

思ふに吉野朝五十七年を通して終始一貫されました、天皇の偉大なる御理想は、不幸にして實現せられませんでしたが、其の光は決して消ゆるものではありませんでした。

天皇の御遺志は、吉野朝の君臣が之を奉戴して夢寐にも忘るゝことなく、我が國史の上に美しく、尊く、誇るべき一大精華を咲き亂れさせたのであります。

斯くしてそれから五百年の後に於て、御英明なる明治天皇の御力と、國民一致の力とによりまして、建設せられました明治維新の大業こそは、實に後醍醐天皇の御理想の實現であつたのであります。

當時遠江の井伊谷城にあらせられまして、遙に御父君の御訃報を聞召された宗良親

王は非常に御悲嘆のあまり、折からの霜に紅の色をさした、井伊谷城のお庭の楓の一葉をお添へになりまして、次のやうなお歌を、四條隆資卿の許にお送りになりました。

思ふにもなほ色淺き紅葉かな
　そなたの山はいかゞ時雨る〳〵

この御歌を拜誦した隆資卿は、直ちに筆をとられて、

この秋の涙をそへて時雨にし
　山は如何なる紅葉とか知る

と、認めて御返歌を申上げました。

御遺骸は御遺詔によりまして、御終焉の御姿を改めず、其のまゝ如意輪寺の御堂の後の方に、北向におさめ奉りました。

塔尾の御陵と申します。

五百七十餘年の今日、私共が杖を引いて、苔蒸せる御陵の下に額けば、悲憤の涙は止めんとして止むる事が出來ません。

風なきに亂れ散る陵頭の櫻花にも、月影清き秋の夕、草間にすだく蟲の音にも、ひたすら君の御心を痛み奉るかのやうに思はれます。

不世出の聖天子明治天皇は、夙に後醍醐天皇の御偉業を御追慕あらせられ、明治二十二年欽定憲法の發布を、皇祖皇宗の御神靈に告げ給ふに、あたりまして、特に吉野宮を、創建させられましたが、大正天皇も亦、先帝の叡旨を繼承せられまして、大正七年吉野神宮の徽號を宣下し、橿原、明治兩神宮に准じ給はれました。

× × × × × × × × ×

吉野神宮讃仰の歌

（一）

笠置の山のむら時雨　隱岐の小島のさ夜あらし

おほへる浮雲拂はむと　いたづき坐しゝ畏さよ

（二）

天つ日影のさし出で、　仰ぐ建武のまつりごと
神武の昔にかへさんと　盡したまひし尊さよ

（三）

花の吉野に宮敷きて　皇國の榮守ります
御稜威の光たゝへつゝ　齊きまつらむ諸共に

〔二〕後村上天皇の御即位

皇家中興の大業を一大理想と仰がれ給ひし、中興の英主後醍醐天皇も、御聖運未だ開けず、其の精華をもみそなはせ給はずして、遂に雲深き吉野の行宮に神去り給ひました。

暗夜に燈火を失ひ、大海原に櫓も櫂も失つたやうな、吉野朝廷の人々は、一時は、どうしたならばよいものかと、途方に暮れて居りましたが、然しあの哀痛極まりなき先帝の御遺詔は、痛く是等の人々を感奮興起せしめまして、新帝後村上天皇の下に馳せ參じ、捲土重來の意氣を以て、飽くまでも逆徒平定の大業を實現せんとの、凛然たる意氣は吉野行宮の内外に充滿て居りました。

後村上天皇には眞に恐れ多い極でありますが、軍國多事の際とて、忝けなくも、御即位の大禮を擧げさせらるゝ御事もなく、唯僅に三種の神器を御拜禮ありまして、伊勢の皇大神宮へ奉幣使をお立てになつたばかりでありました。

吉野朝廷の總參謀長とも申す、北畠親房卿は、此時遠く常陸の小田城にありまして、軍國經營の事にこれ日も足らざる有樣でありましたから、心ならずも、親しく新帝の御側に奉侍する事も適ひませんために、洞院實世、四條隆資兩卿が、常侍補弼の

大任に就かせられました。

斯くて各地にゐらせらるゝ宮様方にも、それ〴〵綸旨をお下しになりまして、協力一體、一意天下恢復の大業に努められました。

楠木正行は和田和泉守正武以下二千餘騎を率ゐて逸早く馳せ參り、皇城守護の大任にあたりましたから、叡感いとゞ頼母しく見えました。

此の當時、日本の各地に於て吉野朝廷のために、萬丈の氣を吐きつゝある忠義の人々は、大和の開住西阿、河内の楠木氏の一族、伊勢の北畠顯信等でありまして、各東西北の堅壘により鼎の位置を取つて、吉野の行宮を守護し奉りました。

更に越前には脇屋義助あつて、黒丸城に斯波高經を攻め、遠江には井伊介の一族が、征東將軍宗良親王を奉じて、高師泰と相對し、常陸には北畠親房卿小田城にあつて、高師冬を防ぎ、四國には土居、得能兩氏が征西將軍懐良親王を奉じて、細川定禪と戰ひ、九州には菊池、阿蘇兩氏があつて、一式、少貳と互に相戰つて居りました。

た。

然し乍ら各地に於ける吉野朝廷の勢は矢張り年と共に衰へ行くのみでありまして、興國三年には脇屋義助、伊豫に死し、同四年には親房卿も常陸に志を得ずして吉野に歸り、北國も、關東も、四國も官軍の勢は全く地に墜ちてしまひました。

然し流石に中心の吉野の行宮には少しの動搖もありません。

之は全く金剛山下に菊水の旗を飜して、一族を擧げて、皇城守護の大任に當つてゐる、楠木氏一族の力による事でありまして、若しも楠木氏が無かつたならば、貴き神器はあつても、果して之を何處に守護し參らすことでありませう。

實に吉野朝廷の興亡は渺たる我が楠木氏の一族に負はされた、尊い重い光榮ある一大使命でありました。

〔三〕 親房卿關城にあつて神皇正統記を著す

北畠親房卿は、具平親王の子孫で、權大納言師重の子でありました。

後醍醐天皇の御信任を得て、大納言に陞り、後に位は從一位にまでも進んだのでありますが、實に文武兼ね備へた偉人でありました。

元弘の初め以來、忠勤を勵んだばかりでなく、深謀熟慮を以て、吉野朝廷のために大規模な劃策を建て、東奔西走して、王業の恢復に、全生涯を捧げた、吉野朝唯一の柱石と仰がれた人であります。

卿は延元三年九月以來、遠大なる計畫の下に鋭意關東の經營に任じて、興國四年十一月まで前後五年間、常陸國小田、關、大寶の諸城に立籠つて東北に於ける全官軍を指揮し、高師冬等に對抗しては、屢々東下せる足利氏の大軍を脅して居りました。

然るに後醍醐天皇は、延元四年八月十六日、吉野で崩御遊ばされ、新帝後村上天皇が御卽位遊ばされました。

此時親房卿は直に吉野に赴いて、補弼の大任に當るべきでありましたが、如何にしても常陸を去る事が出來ません。

そこで陣中の暇々に、深夜燈火を挑げては、自分の意見を纒めて、神皇正統記六卷、及び職原抄を著して、之を吉野に送り、新帝の御參考に供し奉つたのであります。

神皇正統記は、神代より後村上天皇に至るまで、御歷代の事歷の大要を記して、皇祖建國の精神を說き、吉野の朝廷の正統なる所以を明かにして、亂臣賊子共を戰慄せしめた、一大典籍であつたのであります。

『天位は皇孫が確實に繼承せらるべきものである。

吾國は萬世一系の君主國であらねばならぬ。』

といふ事は、親房卿の最も力を入れて說かれた所であつて、矢石の間に於て、一卷

の參考書もなく、書き記された卿の努力は、吾が國史の上に不滅の光を放つてゐるのであります。

其の後親房卿の奮闘も、苦節を渺たる常陸の諸城に維持しました南朝義烈の人々の忠誠も其の効なく、關、大寶の二城も陷りましたため、親房卿は海路伊勢に歸り、楠木正行と共に新帝を扶け奉つて鋭意京都恢復に努力せられましたが、雄圖遂に空しく、正平九年四月十七日、南山雲深き賀名生の里に薨去せられました。

大和、吉野郡賀名生村大字和田、五條町から黒瀧川に沿ふて、十津川街道を二里餘り進んだ所の、小高い丘陵の奥に建てられた、苔むした五輪の塔は、卿の靈墓であります。

福島縣伊達郡靈山村の靈山神社と、大阪市住吉區の阿部野神社は共に卿と顯家卿との英靈を奉祠した別格官幣社であります。

御英明なる後醍醐天皇を輔け奉つて、忠興の大業遂に成らず、亂臣賊子の擅に皇統を擁立して、正統の絶えんとするを嘆きつゝ逝かれた、卿の心事に想ひ到る時、誰か萬斛の涙を濺がない者がありませうか。

〔四〕天龍寺の建立

延元三年尊氏直義兄弟は、夢窓國師のすゝめによりまして、後醍醐天皇に對し奉りし所行を深く悔恨し、之を謝し奉ると共に、敵味方一切の戰場の露と消えた靈魂を吊はんために、國毎に一つのお寺を建てゝ安國寺といひ、一基の塔婆を作つて利生塔といひました。

其の翌年の秋、後醍醐天皇は南山の霧に冒され給ひまして、八月十六日遂に崩御遊ばされましたから、斯程迄に大逆を敢てした彼尊氏と雖も、矢張り日本人である以上、流石に廣大無邊なる聖慮に恐懼して、哀傷に耐えず、悔恨の情切なるものがあつ

たのでせう、彼は直に七日間の政務を廢し、謹んで哀悼の意を表して、天皇の御冥福を心から祈り奉りました。

夢窓國師が直義に向つて申しますには、

『近年のやうに五穀が實らず、惡い病は流行し、盜賊は到る所に横行して、兵亂は止む時なく、國民は眞に塗炭の苦に惱んで居ります。

斯樣に天災の續いて起るといふ事は、是は全く吉野の先帝の御神靈の御憤りが深くして、國土に禍ひをなさるゝ事と信じます。

でありますから、到底人力を以て、この天災を除くといふことは出來ません。

此頃私は不思議な夢を見ましたが、先達も吉野の先帝が、鳳輦に召して、龜山の行宮にお入り遊ばしたかと思ひますと、幾程もなく崩御になりました。

其の後も時々金龍にお乘りになつては、大堰川の畔を逍遙してゐらつしやいます。

就きましては、この御神靈のお怒りをお慰め申すためには、どうしても一つ然るべき伽藍を御建立になつて先帝の御菩提をお吊ひになりましたならば、天下は必ず靜つて國民は平和に其の生を樂しむことが出來ませう。』

と申しました。

尊氏、直義はこの不思議な、國師の夢物語を聞いては、非常に恐れ驚きました。

二人が今日まで、歩んで來た跡方を靜に顧みて見ますとき、二人の良心は、果して何を彼等に囁いたでありませう。

幾度か天皇の大御心を惱し奉つり、數多くの忠臣義士を傷め損つた事を思ひまする時、二人の心は決して決して、平和なものではありませんでした。

『國師はそんな不思議な夢を見られたのでしたか？　さう申せば拙者も、先帝崩御以來は兎角心苦しい思ひに惱まされて、獨り苦しんで居ります。

就いては早速、一宇の堂塔を建立して、神靈をお慰め申すことにいたしませ

う。』

と尊氏は答へました。

愈々尊氏兄弟が、天龍寺造營を發願いたしますといふと、光嚴上皇はその奏請をお容れになりまして、洛西龜山殿を禪刹とすることをお許しになり、夢窓國師を開山として、靈龜山曆應資聖禪寺の寺號を賜はりました。

そして後醍醐天皇の御冥福をお祈りになりました。

尊氏は此寺を建てる費用を得るためには、天龍寺船と稱する貿易船を出して、元と貿易を行ひ、其の利益を得て造つたのであります。

六ヶ年の長い歳月を費して、興國六年に出來上つた、佛殿、法堂、山門、鐘樓まで七十餘宇の伽藍は、水に傍ひ、山に依つて、其の規模は實に壯觀なものでありました。

尊氏は、その年の八月二十九日、丁度、後醍醐天皇の御七年忌を以て天龍寺供養を行ひ、翌三十日には、光嚴上皇親しく臨幸遊ばされて、佛事を取行はせられたのであります。

當日尊氏は八葉の車の鮮かなるに簾を高く揭げ、衣冠を正して乘り、其の後には多くの宗徒の諸大名が、弓箭、兵杖を帶し、思々の馬鞍にて附き從ひ、之を眺めんとて、數多の貴賤男女は岐に充滿て、其の儀式の壯觀なることは、實に前代未聞といはれました。

第一〇篇　楠木正行の蹶起

〔一〕　眠れる獅子の雄叫

父正成が延元々年の五月、後醍醐天皇の大命を拜して、逆賊尊氏を討滅ぼさんがために、攝州湊川に於て、戰死を遂げてより早くも十年、當時十一歳の少年であつた一子正行は、故郷の金剛山麓に於て、父と母との教を、健氣にも胸に刻みつゝ、來る日も〳〵、不斷の修養を怠りませんでしたが、今や心身共に發達して、二十一歳のうら若き丈夫となつたのであります。

吐鵑血に泣く五月雨の空、青葉茂れる櫻井の里に、父正成と別れし折の哀痛なる遺訓は、餘りにも強く耳に殘つて、寢ても醒めても忘るゝ事はありません。

尊氏方より送り來つた、父の變れる姿を目のあたり見て、餘りの悲しさに自害せんとした其時、母上の訓へ給ひし言の葉は、餘りにも深く胸に刻みつけられて、一日として消ゆる時はありません。

金剛山の麓に菊水の旗を飜して、

『君が御代となし奉り、亡き父の仇を討たねばならぬ。』

といふことは、どんなにこのうら若い丈夫の胸の血潮をたぎらしめたことでございませう。

正行は前にも記して置きましたやうに、延元元年の冬にも、後醍醐天皇が吉野に御遷幸の時にも、同四年崩御の際にも、一族郎黨を引連れては、皇城守護の大任にあたり、吉野朝廷の危機に臨んでは、常に逸早く行宮に馳せ參じては、天子様の大御心を安じ參らせてゐたのであります。

ですから帶刀檢非違使左衞門尉河内守として、吉野朝廷からは夙に重い御依賴を

一身にうけてゐたのであります。

前にも述べましたやうに、興國三年には、脇屋義助伊豫に死し、同四年には、北畠親房卿も常陸に志を得ずして吉野に歸り、北國も、奥羽も、四國も、眞に南風競はず、吉野朝廷の威勢は全く孤影落日の有様でありました。

この時に當つて、獨り中心の吉野の行宮のみには、些かの動搖もなかつたといふことは、之は偏に正行以下一族の者達が、協心協力、至誠を以て皇城を守護し參らせたためであります。

彼の賴山陽が、

『若しも楠木氏が無かつたならば、貴き神器はあつても、果して之れを何處に守護し參らすべきであらう。』

と申した言葉は、眞に偉大なる正行の功績を物語つてゐることゝ思ひます。

北畠親房卿が常陸から吉野に歸つて參りましてからは、親房卿始め、四條隆資卿等の力によつて更に偉大なる大規模の策戰計畫が廻らされてゐたのであります。

果せるかな、正平元年になると、京畿の官軍は、東に於ける關東官軍の蜂起、西に於ける九州の征西將軍の宮の御活動と相呼應して、將に大活動を開始せんとしたのであります。。

この時に當りまして、京畿官軍の統將は、申す迄もなく、我が楠木正行であり、其の本營は實に河内の東條城であつたのであります。

嗚呼偉大なる正行の奮起！

それこそ將に眠れる獅子の雄叫びであつたのであります。

尊氏以下賊軍の驚愕は、それは〳〵筆にも言葉にも言ひ盡すことは出來ません。

京都の町の人々は、

『今にも市中に戰が起る。』

といふ、恐ろしい噂に、戰々競々として、京都のお寺では、あちらでも、こちらで

も、一時に御祈禱を始め、市民は荷物を片附けて逃げ支度をするといふ程の大騒ぎでありました。

〔二〕藤井寺の合戰

正行は正平二年八月十日、和泉の和田氏の一族を率いて、紀伊國に進撃し、隅田黨の隅田城を攻撃して、大勝を博したのであります。

果然之を機會として、多年尊氏の暴狀を怨みながら、雌伏幾年の京畿の官軍は到る處に蜂起して、紀伊、熊野から、和泉、攝津にかけての豪族が之に饗應して、奮ひ立つものが少くはありませんでした。

『正行が蹶起した！』

と、いふ報を得た尊氏は、非常に驚きまして、

『楠木の子なればこそ、さもある事であらう。然し、正行如き若者に、近畿諸國を侵されて、洛中が驚き騒いだとあつては、實に天下の物笑ひ、且は武將の恥辱である。

急ぎ馳せ向つて退治してしまへ。』

と、部下の細川陸奥守顯氏を大將として、宇都宮三河入道、佐々木六角判官、松田次郎左衞門、赤松信濃守範資、舍弟筑前守範貞、村田、奈良崎、坂西、坂東、菅家の一族と共に、都合三千餘騎を河内國へ出發させました。

斯くて足利氏の大軍が河内の藤井寺（南河内郡長野村）に到着したのは、八月の十七日頃でした。

藤井寺から河内の東條へは凡そ七里の道程ですから、顯氏はすつかり油斷して、

『たかの知れた河内勢、いくら急いで攻め寄せると申しても、そんなに早く來ることはあるまい。

早くて、明日か、明後日であらう。』

と、一同は鎧甲を解いて休息し、或は馬の鞍を下して、悠々と休んで居りました。

この有様を知つた正行は士卒を集めて、

『敵は藤井寺附近に攻め寄せたさうである。戰は夜討に限る。今夜こそ賊軍を攻め潰して、光榮ある軍門の血祭にしてやらう。』

と申しました。

意氣揚れる楠木勢の七百騎は、正行を先頭に馬に一鞭あて、眞暗な夜道を藤井寺へと急ぎました。

やがて間もなく、譽田八幡宮の方向に當つて、松明の光が夥しく、何とも知れぬ物音が夜の靜さを破つてざわ〳〵と聞えて參りました。

細川方の物見の兵共が、

『そら！　敵の夜襲だ……』

と、知つて驚いた時は、もう遲かつたのです。

夜目にもしるき菊水の旗が、翩翻と飜つて、降つて湧いたる如き楠木勢の大軍は、藤井寺の附近に滿ち〳〵て居りました。

『そーら、敵の夜襲だ！』

『拙者の鞍はどうした』

『貴公の甲はそれは拙者のでござるぞ』

『いや之はどうも失禮、どうりで、少し大きく眼が見えぬで困つて居つた』

『おいこら！　早く鎧を着けないか？　何をぐず〳〵してゐるのだ』

全然、細川顯氏方は混亂に陷つてしまつて、まるで眞暗の中に蜂の巣をついたやうな騒ぎです。

楠木軍の大將正行は、この時とばかりに、馬を陣頭に進めて、大音聲に、

『者共進め！。』

と下知しましたから、七百餘騎の軍勢は、まるで潮の流れ込むやうに、どつと一時に攻め入りました。

敵の大將細川顯氏は、寢ぼけ眼に鎧を肩にかけましたけれども、未だ上衣も着けなければ、太刀さへも持つて居りません。

『何だ！　大將がこんなだらしない周章方では仕方がないではないか』

この有樣にすつかり憤慨した、村田の一族六騎は、小具足許を身につけて居りましたが、誰の馬であらうがかまひません。

手當り次第に打乘つて、雲霞の如き楠木勢の中へ突擊して、火花を散らして戰ひました。

楠木勢は楠木勢で、

『何を小癪なこの逆賊奴！

一人も殘らず討取つてしまふから覺悟をしろ！』

と、おめき叫んで戰ひましたが、哀れにも皆楠木軍の切先にかゝつて、刺し殺されてしまひました。

其の中に大將顯氏も用意が出來たのでせう。

兵卒百騎許りを從えて、

『敵は小勢だぞ。

後れを取つて末代までの恥を殘すな……』

と大聲を擧げて勵しましたけれ共、悲しい事には、四國中國から、驅り集めた木葉武者ばかりですから言ふ事を聞きません。

逃ぐるを知つて、進むを知らぬといふ卑怯者であるために、大將も士卒も先になつて、退却してしまひました。

勝ち誇つた楠木勢は、愈〳〵勢を得て、

『ワーッ！』

とばかりに喊聲を擧げて追擊しましたから、顯氏は遂々天王寺、渡邊橋の邊まで追ひ詰められて、危く討たれさうになりました。

『大將危し！』

と知つた、六角判官、同舍弟六郎左衞門の二人は、暫く取つて返して防ぎ戰ひましたが、忽ち楠木勢のために討たれてしまひ、赤松信濃守範資、同舍弟筑前守も、取つては返し、取つては返して、七八度迄踏み止まつて防ぎ戰ひましたが、何れも討たれてしまひました。

續いて粟生田小太郎以下の勇士も多く討たれて、哀れな最後を遂げました。

かゝるうちに顯氏は命からく〳〵逃げ延びてしまひました。

斯くの如く正行は、この一戰に十數倍の大敵を討破りましたので、恰も草木の風に靡くが如く附き從ふ者が多くなつて、楠木軍の兵威は忽ち近畿に振ひました。

藤井寺の快勝は、やゝもすれば衰へかゝつた、各地の官軍に非常なる衝動を與えました。

關東に於いては、常陸、下野の間に於て、小山、小田兩氏が官軍に復歸して、競ひ起るといつた具合に、吉野の朝廷では、肥後方面の官軍にも、一層の激勵を加えて、一擧天下恢復の大業を成さしめんと謀られたのであります。

〔三〕安部野に賊將山名時氏を討破る

河内藤井寺の合戰に於いて意久地なくも防ぎに出した味方の大將細川顯氏が、正行のために散々に打破られて、這々の體で歸つて參りましたから、尊氏の驚きは一通りではありません。

正行が戰勝の勢に乘じて、近畿地方を打從えて、京師に迫るのも、目捷の裡にあると知りましたから、尊氏たる者どうして、じつとして居られませう。

そこで尊氏は、十月の半頃になりますと、今度は山名伊豆守時氏、と更に細川陸奥守顯氏と兩人を大將として、六千餘騎を引き連れさして、住吉、天王寺方面へ向けて出發させました。

顯氏は、この前の九月の戰ひに、正行のために散々に打破られた苦い經驗があり、天下の人々から、

『臆病者の顯氏』

と罵られた事を生涯の恥辱と心得ましたから、出陣に際しては、四國の兵共を住吉明神の前に呼び集めて、

『この度の合戰に於て、また〳〵前回の藤井寺の時の樣に、意久地なくも打敗けて歸るやうな事があつては、それこそ武門の名折れであるばかりでなく、自分も將軍に合はす顏もない事になるのであるから、汝等もよく〳〵心して、身命を輕んじ、この一戰に以前の恥を洗ぐやうにしてもらひたい。

この事はきつと申付けて置くぞ。』

と士卒を勵まして、申渡しました。

一同は社頭に額いて、神水をいたゞき、

『この度の合戰には、一歩も引かず戰つて討死いたしますから、どうか楠木軍を木葉微塵に打碎くことの出來ますやうに』

と、戰勝を神明に誓つて、五百騎が一隊となり、大旗、小旗、下濃の旗を三流押立てゝ、いとも健氣に出發いたしました。

大手の大將山名伊豆守時氏は、千餘騎を率ゐて、住吉に陣を取れば、搦手の大將細川陸奥守顯氏は、八百餘騎で天王寺に陣を取りました。

この度は二人とも、よく互ひ〳〵に連絡を取りつゝ、頗る愼重な態度をとつて、敢て急に動かうともしません。

この狀勢を知つた正行は、

『敵を何時までも、住吉明神や、四天王寺の所在地である、住吉、天王寺の邊に滯陣させて、若しも彼地に、永久的の城郭でも、構へられるやうな事があると、それこそ味方は、神に向ひ、佛に向つて、弓を引き、矢を放つ事になるので、神佛の御加護を祈る官軍としては、之に優る不利益はない。

之は一日も猶豫せず、打拂つてしまはねばならん。』

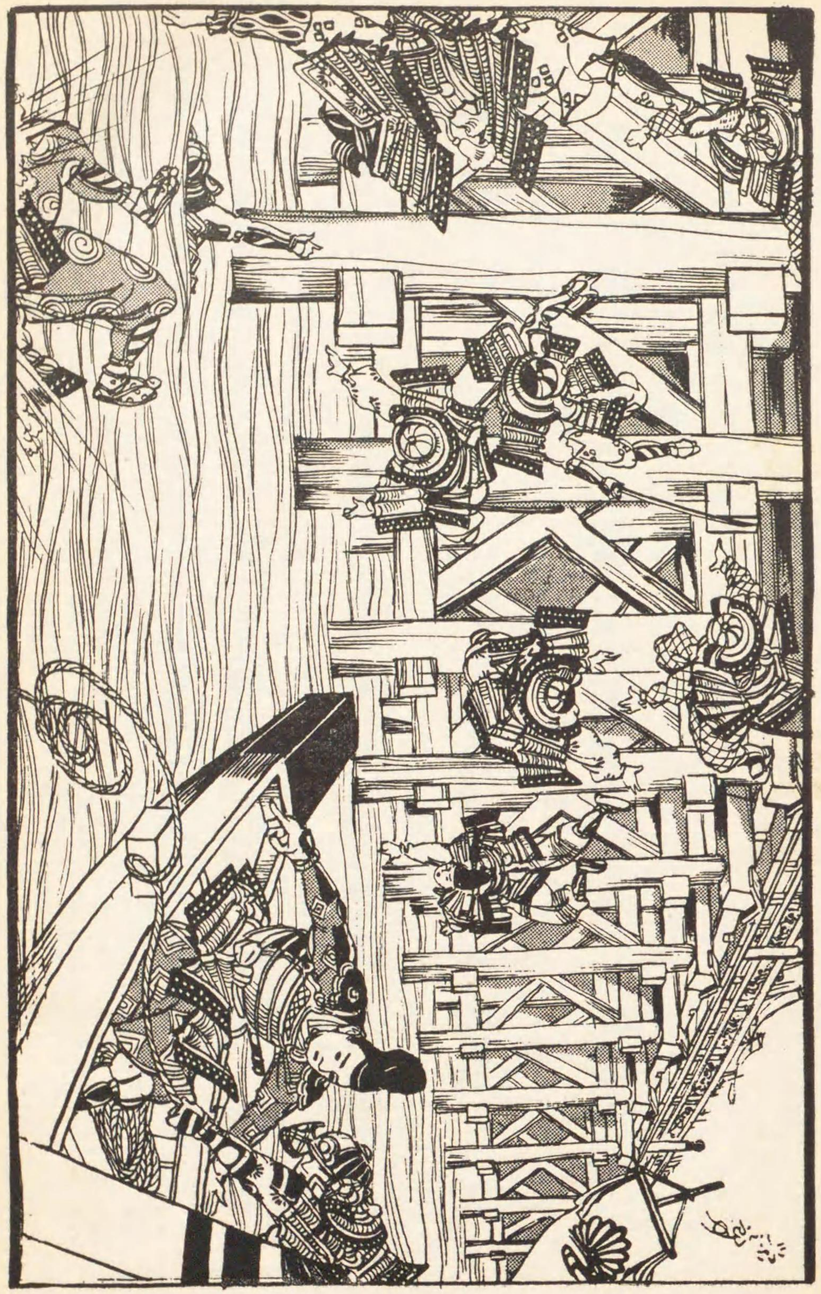
と、そこで先づ、

『住吉の山名勢を打破つて置いて、逃ぐるのを追つて討つたならば、恐らく弱蟲の天王寺の細川勢などは、戰はずして走らすことが出來るに違ひない』

斯う考えました正行は、不意に二十六日の夜明方五百餘騎を引連れて、石津の民家に火を放して、瓜生野の北の方から押寄せました。

山名伊豆守はこの様子を見て、

『父の正成以來、謀の深い楠木勢、敵は決して一方より攻め寄せることはあるま



〈助を士將の敵てに畔橋邊渡津攝行正木楠!!情の士武

い。

必ずや、兩方面から攻め立てるに決つてゐる。

是は軍を分けて、相戰はねばならん。』

と、赤松筑前守範貞に、攝津、播磨の軍勢八百餘騎を率ゐさして、海岸方面を防ぐために、住吉の浦の南に配置し、土岐周濟房、明智兵庫助、佐々木四郎左衞門等には、二千餘騎の軍勢を引き連れさして阿部野の東西に陣を取らせて、用意おさ〳〵怠りませんでした。

細川顯氏は手勢の外、四國の兵五千餘騎を率ゐて、態と本陣を離れず、豫備隊として天王寺に控へて居りました。

大手の大將山名伊豆守、舍弟三河守、原四郎太郎、同四郎二郎、は、百餘騎を以て遙に砂煙を揚げて進擊して來ます、楠木勢の先頭部隊に當らうと、瓜生野の東に突進しました。

正行は所々に卷き揚る馬煙を見て、

『はは……、敵は軍勢を分けて四ヶ所に配備したな。

あの馬煙は確にそれに違ひない。

こうなれば、敵に比べて兵數の少い我が軍を幾つかの部隊に分けるといふことは、如何にも味方の不利益だ。

よし！　此方にもその覺悟がある。』

と、今まで五隊に別けてあつた二千餘騎を、全部合して一隊として、唯もう眞一文字に瓜生野さして突擊しました。

初の中は、兩軍互ひに弓矢を以て、烈しく射て居りましたが、其の中に山も崩るゝやうな喊聲が揚つたかと思ふと、敵味方六千餘騎が互に入亂れて烈しく戰ひ始めました。

其の戰場の物凄いこと、太刀に突貫かれて倒るゝ者、矢に傷ついて倒るゝ馬、血潮は見渡す廣野を紅に染めて、むごたらしい見るに耐えない死骸は、到る所に累々として横たはつて居ります。

總大將の山名時氏も、此時既に切傷、射傷七ヶ所の淺傷、深傷を受けて、辛くも身を以て、主をかばふ士卒の陰に隱れては痛む傷口の血を拭ふて居りました。

此時楠木勢の中から、年の頃二十歳ばかりと思はるゝ一人の若武者！

洗皮の鎧に、大太刀、小太刀二振を帶びて、六尺餘りの長刀を小脇に挾んで、

『吾こそは、楠木勢の中にさる者ありと知られた、和田新發意源秀なり。

吾と思はん者は來つて、尋常に勝負いたせ。』

と名乘つて、小歌を謠ひながら進み出ました。

續いて是も法師武者の身長七尺餘りも有らうかと思はれましたが、

『吾こそは楠木勢にさる者ありと知られた、阿間了願なり、』

と名乘つて、唐綾威の鎧に、小太刀を帶びて、柄の長き長刀を馬の平頸に引添へ

て、意氣揚々と現れました。

『いやどうも見事な荒武者ではござらぬか？』

『誠に敵ながらも天晴な武者振りでござる。』

などゝ口々に賞めながら、山名の軍勢達が目を見張つて驚いて居りました。

和田と阿間の二人は、四邊かまはず突進んで、前後左右を突いて突いて荒れ狂ひ、矢庭に敵を斬倒すこと、三十六騎、尙も大將時氏目がけて突進みました。

『あつ！　兄の時氏が危い……』

と見た舍弟の三河守は、一騎討の勝負ではとても叶はないと思つたのでせう。

大聲を擧げて、

『あれなる若武者、多勢を以て討取れと下知しましたから、百五十騎ばかりが横合から馳せつけました。

正行の方も亦、

『和田を討たすな、阿間を救へ。』

と呼ばはりましたから、またも兩軍鏑を削つて攻め戰ひ、太刀の鍔音は天に轟き汗馬の足音は地を動かすといふ有樣です。

互に味方を勵ましては、

『引いて恥を殘すな。進め〳〵。』

といふ聲に、一人の退く者もありませんでした。

然し乍ら、大將山名伊豆守時氏は、

『既に自分が容易ならぬ傷手を蒙り、其の上士卒も大方は傷を受けぬ者はない有樣に、今は到底敵することも出來ないと思ひましたから、殘念ながら後方の部隊と一緒にならう。』

と決心して、天王寺を指して退却し始めました。

斯くて思ふ存分に敵を打破つた正行は、

『それ敵は逃げたぞ。』

一人も殘らず討取つてしまへ。』

と、部下を勵まし〳〵追擊しましたから敵ひません。

この時健氣にも取つて返へした、山名三河守、原四郎太郎、同四郎二郎兄弟、犬飼六郎主從三騎、何れも討たれてしまひました。

『味方の退却！』

と聞いて、二陣に控えて居りました、土岐周濟房、佐々木六郎左衞門は三百餘騎を引連れて、阿部野の南に進み出で、奔馬の樣に追ひ迫り來る楠木勢を暫らく防いで居りましたが、目賀田、馬淵の者共が三十八騎一度に討たれましたために、意氣すつかり沮喪して是も亦天王寺へと引揚げてしまひました。

一陣も二陣もこの樣にして脆くも敗れましたから、海岸の方面に配置してあつた軍勢も天王寺方面の軍勢もすつかり浮足立つてしまつて、

『若しも楠木勢のために、あの後を流るゝ大川の橋でも徹去されるやうなことがあつたならば、それこそ一人も生きて歸ることは出來まい。

こうなれば先づ橋を警戒して、今の中に引上げねばならん。』

と、渡邊橋を指して引上げましたから、さらでだに狹い橋の上は、まるで芋の子を洗ふやうな騷ぎで、押合つて橋から落ちては、浮きつ沈みつ、流れて行く者が幾人あるか知れません。

山名時氏は自分が深傷を負ふたばかりでなく、愛馬も既に傷ついてゐるし、其の上敵は愈々激しく追つて來ますから、今は倒底免れぬ所と覺悟したのでせう。

渡邊橋の橋の畔で切腹しやうとしました。

ちやうどこの處へ、河村山城守は只一騎戻つて來て、近寄る楠木勢二騎を切つて落し、三騎に傷を負はせて、暫らく防いで居りましたから、安田彈正は、時氏の傍に走りよりまして、

『如何なることでございますか。

そんな氣の弱いことでどうなさいます。今は決して大將の腹を切らるゝ時ではございますまい。』

と急ぎ扶けて引き退きました。

顯氏以下も皆這々の體で、京都に逃げ歸りましたが、親は討たれても子供は知らず、主人が討死しても家來は之を救はず、物具を脱ぎ捨て、弓を杖について、眞暗の夜道をひた走りに、京都へ逃げ歸りました有樣は、實に見苦しい極みで、天下の人々の物笑ひの種となりました。

〔四〕武士の情

勇敢な楠木勢のために、散々に打破られて、渡邊橋の畔にまで追ひ詰められ、橋を渡らうとして、揉み合ひましたために、橋から川の中に眞逆樣に轉げ落ちて、浮きつ沈みつ流さるゝ者は數を知りません。

この樣子を眺めた正行は、

『者共！　早く救ひ上げてやれ。

逃げる者は最早追はぬでもよろしいから。』

と、部下の家來に命じました。

家來達は吃驚して、

『川に落ちたのは、味方ではございません。

あれは皆敵でございます。

打捨てゝ置けば、其の中に好い鹽梅に、溺れて死んでしまひませう。』

『敵なればこそ、尙更救つてやれといふのだ。』

どうも家來達には、情ある床しい正行の眞意が良く判らないやうです。

一同不思議な顔をして、

『あれ程幾度も〳〵、手向ひをした奴等を助けて置くことはないでせう。』

『いや決してさうでない。

戰は正々堂々とすべきものだ。

正義の軍に刄向ふ者こそは、飽迄も討取ってしまはねばならんが、今更力盡きて逃れる者が、水に溺れて苦しんでゐるのを、何よりの幸ひと見てゐるやうな事は、武士のすべき事ではない。

病者や、弱者の前にはすべて一視同仁じゃ』

斯うして正行の命令によつて、救ひ上げられた敵兵は五百餘人も居りました。

けれども、救ひ上げられたは救ひ上げられましたものの、時は師走の初めであり、氷よりも冷めたい川水のために、すつかり身體の自由を失つて、大方は息も絶え〳〵になつて居りました。

とりわけ、淺傷深傷を受けて居りました者は、一層ひどうございした。

正行は、

『早く民家に走つて行つて、藁束を集めて來い。さうして體を暖めてやれ。』

と一同の者に申付ました。

やがて士卒の手によつて、附近の百姓家から集められた藁束は、此處彼處に山と積み上げられて、火を點ずると炎々と、燃え上りました。

そして赤々と燃え上る焚火の周圍には、今、川から救ひ上げられた、賊兵達がさも嬉しさうに、暖まつて居りました。

正行の情ある行爲によつて、漸くに息を吹き返した兵士達のために、正行は更に、士卒達に、

『定めし衣服も濡れてゐる事であらうから、寒いことであらう。

用意してある小袖を與えてやれ。

尙、重い傷を受けてゐる者には、藥を與えて、療治さしてやるが良からう。』と命じました。

こんな風にして、一同は四五日の間、いとも手厚い看護を受けましたために、すつかり元氣を恢復してしまひました。

敵の首を取るか、敵に首を取らるゝか、命の遣り取りをする戰場に於て、誰か敵將から、斯かる手厚い看護を、受けると思つてゐるものがありませうか？

彼等はまるで夢かとばかりに喜んで、正行に對する心からなる感謝と感激のために、胸はもう一杯になつて居りました。

『おいどうだ、貴殿は氣持ちは、直つたかな。』

『有難ふ。もう藥を飲ましていたゞいたので、元氣はこの通り、すつかり良くなつた。』

『それは何より結構だ。肩先の傷はどうだ。』

『いや之も幸ひさ程深くはなかつたから大丈夫、この分ならもう四五日も經てば、立派に働ける體になれる理だ。』

『それは良かつたな——。

それにつけても、正行殿の御親切は忝けないものではござらぬか。』

『拙者は死んでも、この御恩は忘れない。

拙者はどうも何時の戰にも、河内勢の猛烈に強いのが、不思議でならなかつたが今度の事で、その理が明瞭とよく判つた。』

『成程貴殿の申さるゝ通り、日頃斯樣な情を懸けられてゐたのでは、誰しも君の馬前に討死する氣になるからな……。』

『所で拙者は斯ふ思ふが、各方の考えはどうだ——

といふのは外でもない。

楠木殿がゐらつしやらなかつたら、それこそ吾々はあの時にもう死んでゐるのだから、死んだつもりで、之からは楠木殿に從つて、此度の御恩報じをしたいと思ふ

のじや。』

と語つて、先の程からこの二人の話を傍にあつて熱心に聞いてゐた人達を、ぐるつと見廻しました。

聞いてゐた一同は、吾が意を得たりとばかりに、

『さうだとも〳〵、吾々も先日から心の奥にちやんと、さう決めてゐたのだ。』

と、賛成しました。

『楠木殿こそ、血あり涙ある眞の大將だ。』

『こんな大將の下に働く部下の人々は、どんなに幸福だらう。』

と、彼方でも、此方でも、正行を讃美する、感嘆の聲は止みませんでした。

正行は四五日の後、一同を集めまして、

『身體の具合はどうか？

寒い時の事であるから、ずい分傷口も痛むことであらうが、まあ充分に手當した方が良からう。』

と、親切に尋ねてやりました。

一同は眼に美しい感謝の涙を一杯に湛え乍ら、

『この度の深い〳〵御親切は、何と申上げてよろしいか御禮の言葉も出ず。私共は肝に銘じて忘るゝ事はございません。』

と心から申述べました。

正行は更に馬に乘る者には、馬を與えてやり、物具を失つた者には夫々物具を着せて、京都に送り還してやりました。

この後四條畷の合戰に、正行の手につき從つて天晴れ討死を遂げたのは、實にこの時正行に救はれた人々であつたと申します。

第一一篇　辨の内侍

〔一〕秋の夜の御宴

秋の訪れを早く見せるこゝ吉野の山奥では、全山既に龍田姫の錦を織りなしたる如く、空は愈々清く澄み渡つて冴え渡る月の光にも、鳴き行く雁の姿にも、一入秋の闌けゆくのを覺えます。

静に更けゆく夜の宮居の奥には、蘭燈の光明々と照つて、今宵御前に侍りましたのは、中納言四條隆資卿、洞院實世卿、吉田宗房卿を始め、多くの公卿達でありました。

後村上天皇には明暮、軍國のことばかりに大御心を惱してゐらつしやいましたが、

今宵は御氣色殊にうるはしく打ち寛がせられ給ふて朝臣達の申上ぐる四方八方の御物語りを、聞し召されてゐらつしやいました。

やがて一同に御酒を賜はることになりまして、一人の蔦たけた宮女が、いともしとやかに、土器を捧げて、御前に進み出ましたが、どうしたはづみでありましたか、宮女の手を辷り、落ちた土器は、二つに壞れてしまひました。

さあ大變です。

天皇の御様子は、急にお變りになりまして折角の御思召が如何にも、御不興氣に拜されました。

宮女は御前近きために、たいさう恐懼して、はつと顔を赤らめましたが、とりあへず、

『さかづきのわれてぞいづる雲の上』

と、詠みましたから、天皇は之を聞し召されて、非常に面白くお考えになつたので

ございませう。速座に

『誰かあとの句をつけよ。』

と仰せになりました。

『はっ！』

御聲に應じて吉田宗房卿が、

『星の位の光そへばや』

と、宣べられたので、天皇の御氣色はすつかりお直りになりまして、さらでだに長き秋の夜の明けやうとする頃までも御酒宴を催ふされました。

この歌の意味は、

『盃が雲の上で割れて出たが、星の光の添ふてゐるために、怖氣づいて、遂取り落したのであらう。』

といふのでありまして、つまり

『天子様や、多くの公卿達の並んでゐる席であつたために、あまりに怖氣ついて遂ひ取り落したのであらう。』

といふのであります。

この聰明な宮女こそは、早くより後醍醐天皇をお輔け申上げて、北條討伐の御相談にあづかり、遂に彼の元弘の難に殉ぜられた、絶代の忠臣、右少辨日野俊基卿の息女、辨の内侍でありました。

父君俊基卿が、鎌倉の葛原ヶ岡の露と消えられた後は、頼みに思はるゝは母君だけでした。その母君さえ、此の世をば誠に果敢なきものと思はれて、佛門に歸依されました。そのために、未だ年若い内侍は、先きには父上に死別れ今又母上には生別れて、悲しさと痛ましさに耐え切れませんで、伯父君に當らるゝ三位行氏卿の許に身を寄せて、寂しい遣瀬ない年月を送つてゐるのでした。

所が楠木正成等の精忠によりまして、世は建武中興の春を迎え、天皇にも芽出度隱

岐島から御還幸になりました。辨の内侍は其時に召し出されて御側に奉仕する事になりましたが、其以來片時もお傍を離れず、終始誠忠を以て御奉仕申上げ、こゝ吉野の奥までも附從ひ參らせて、忠勤を勵んでゐるのでありました。

然しこれも内侍にとつては、束の間の夢で、天皇には、南山の霧にをかされ給ひまして、崩御になりました後は、またもや一人淋しき月日を、この山奥に送り迎えて居られたのであります。

〔二〕高師直の恐ろしき計畫

高師直は足利尊氏と同じ一族である名望家の家に生れ、早くより尊氏の執事となつて、攻城野戰の功も中々に多く、尊氏の信任は最も厚いものでありました。

然し其の人格は誠に卑むべく憐むべき人であつたのであります。

元弘の春の夕まぐれでしたが、辨の内侍は京都の清水寺に參詣致しました。その歸途、折柄道の畔に美しく咲き綻びた櫻の花を賞でられながら、歩いて居りましたが、この時師直も亦清水寺に參詣せんとの道すがら、世にも美しき内侍の姿を垣間見まして、

『あ！　あれがこの頃よく殿上の人々にうたはるゝ辨の内侍か？　』

と、それからは絶えず良からぬ心を胸に懷いて居りました。

其後、後醍醐天皇が崩御遊ばされました後といふものは、密に内侍の許へ、手紙を贈り、

『人里離れた吉野の山奥などに寂しき月日を送るよりは、どうか都の方へお出でください。そして、月に花に、樂しい日をお送りになつた方が宜しうございませう。

何時なりとも、お迎えをさし上げますから。』

と、それは〳〵度々うるさい程、内侍の許に申し送つて參りましたが、内侍には曾て一度も御返事を認めませんでしたから、師直は非常に口惜しく殘念に思つて居りま

した。

師直は或日の事、近侍の日野原八と申す者を呼出しまして、

『これ原八、今日はお前に折入つて頼みたい事があるが、もつと近ふ寄れ。』

『はつ！

如何なる御用でござりませうか？

この原八に適ふことでございますれば、如何なる事でもいたしますから、どうぞ御遠慮なく仰せられていたゞきたふ存じます。』

『いやそれは忝けない。

實は少しお可笑な話であるが、吉野の宮居に奉仕して居らるゝ辨の内侍を、既に天皇もお隠れになつたことであるから、都の方へ迎えやうと、先達來度々手紙を差上げるが果して届いたのやら、届かないのやら、宛然石の礫同様、何の返事もない。就いては何とかして、辨の内侍を吉野の奥より連れ出したいのであるが、その方法について何とか其方に良い考えでもあるまいか。』

原八は輕く頭を傾けて考えて居りましたが、やがて、

ハタ！

と膝を打つて、

『原八に良い考えがございます。それは斯うなさいました方が宜しうございませう。

私の知つて居ります者で、松野と申す女がございます。

この女は永らく三位行氏卿のお邸にお出入いたして居る者でございますから、この女にようく旨をお含めになりまして、行氏卿の北の方の心を動かすやうに御工夫なさらなければなりません、それさへうまく參りますれば辨の内侍をお呼出になる位は、恐らく譯のないことでございませう。』

師直は非常に喜びまして、

『成程それはうまい名案じや。では早速松野と申す女を連れてきてもらひたい。』

『はい、畏りました。では只今から、直ぐに行つて參ります。』

やがて原八に伴はれて、松野が師直の所に參りますと、

師直は、

『松野とやらよく來てくれた、忝けないぞ、今日はこの師直が汝を見込んで折入つての頼みがある。

既に原八からも聞かれた事であらうが、三位行氏卿の息女、辨の内侍を吉野の宮居より、當方へ伴れ出してもらひたいのじや。

汝は三位行氏卿のお邸へは度々行かるゝさうであるから、行氏卿の北の方に申して、内侍を我に送り給はれたならば、師直及ばずながら、澤山の所領を差上げ、行氏卿の官位をも進め參らするであらう、

尚汝にも所領を與え、望みの儘の褒美を取らする。

之は申すまでもないことぢや。

何とかこの師直のために、骨を折つてもらひたい。』

と、熱心になつて頼みました。

松野は之は途方もない困つた事になつたと思ひましたが、世にも恐ろしき師直の事でありますから、若し少しでも否むやうなことがあれば、それこそ如何なるひどい目に遭はされるかも知れないと、心よく承知して、この譯を行氏卿の北の方に委細申述べました。

北の方は、困つたことを申してきたと非常に心を痛めました。對手が名にし負ふ尊氏の執權で腹黑な師直のこと、若しもこの申出を下手に斷らうものなら、いつ如何なる難儀がふりかゝらうも知れません。と云つて他に良い考へも浮ばず、とつ、おいつ思案にくれてゐました。

拒絶……後難……後難……おゝ恐ろしい……

承諾……加增……昇位……權力……榮達……

さうだ可哀想だが内侍を犠牲にして自分達一門の繁榮を測つた方がよい。

と遂に師直の申出を承諾してしまひました。こう決心がついてみればつい先まで嫌ひな師直がかへつて如何にも頼母しい人に思はれて、何とかしてこの事の成就するやうに、力を盡さうと、手紙を細々と認めた上、それを松野に持たせて、更に師直の侍二十人許を下僕にやつして、吉野へお遣しになりました。

やがて松野が吉野の御殿へ參りますと、取次の者から、

『只今、都におはします三位行氏卿の奥方からのお使のお方がお見えになりました。』

と、申し上げました。

松吹く風と、岩間を洩るゝ谷川のせゝらぎの外には、訪ふ人とてもない山奥の住居、まして誰を頼るべき人とてもない淋しき昨日今日の内侍にとつて、眞の御母に増して慕ひ奉りし、北の方からの御使と聞いては、如何に嬉しき事でしたらう。

何事かと胸を躍らせながら、直ぐに松野を御前に召されて、北の方よりの消息を披いて讀みますれば、

『お別れいたしまして以來早や幾年、降る雨につけても、吹く風につけても、都離れ給ひし山里の御住居は、如何にお淋しくてゐらせらるゝ事かと、遙かにお偲び申上げては、袖を絞らぬ日とてはございません。

それにつけても、私はこの度幸にも、住吉様へ御參詣いたします道すがら、河内國の高安と申す所に、知邊の人が居りますので、この人の所にお待ち申しますから、お出ましくださいませんか？

久々の御物語りをいたしたう存じます。

果敢なきは眞に世の常にて、まして昨日今日の様に亂れがましい世の中では、この度の機會をはづしては、また何時の日かお目にかゝる事が出來ませう。』

といふのでございました。

このお手紙を讀ました内侍は、もう唯々伯母君に會ひたさの一筋に、

あひみんとおもふこゝろをさきだてゝ
　袖にしられぬ道しばの露。

つまり、身は道芝を踏み分けて居らんけれ共、心ばかりは、もう先方に行つてゐる。といふ意味の歌をまでお詠みになつて、早速主上（後村上天皇）にその旨を申し上げ、しばしのお暇を願ひまして、侍女二人、若侍三人をお供にお伴れになりまして、河内の方へ輿を急がせにました。

〔三〕正行辨の内侍を救ふ

御殿を出ました内侍の輿が、彼此一里餘りも參りましたかと思はるゝ時、とある山裾の道へさし懸りました頃の事でございました。

前方から三十人許の侍が、急いで此方に參るのに出會ひました。

侍の中の頭らしく思はるゝ者の一人が、靜かに輿の前に進み出まして、

『私共は三位行氏卿の北の方の許より參りました者でございますが、北の方には、河内國の高安に御待ち申上ぐる筈でございましたけれ共、彼方は誠に人が多くて、御都合が惡ふございますから、住吉まで參つて、お待申上げるからとの事でございまして、私共は只今お迎へに參りました者でございます。』

と申上げて、有無をも言はず、輿の前後を取卷いて、少しも早く參るやうにとせき立てました。

餘りの事に内侍は非常に驚かせられまして、

『遙々遠い住吉まで、もう日も暮れ懸つて居るのに、どうして行く事が出來ませう殘念ではあるが今日はこれで御殿の方に輿を返してもらひませう。』

と、御供の若侍に申付けられました。

お供の若侍達は、其言葉に從つて、早速輿を返さうといたしますと、師直方の

侍共は非常に怒つて、目を怒らし、言葉も荒々しく、

『折角斯うしてお迎えに參つたのに、今更このまゝお歸りになつたのでは、自分達が困るではないか。

遠いと申した處で、多寡の知れた住吉までの道、早く行くことにいたさう。

さあ出かけた、出かけた。』

と、若侍達を押し除けて、無理に出掛けやうといたしますから、若侍も承知いたしません。

『之は怪しからんではないか。

內侍樣が斯うして、お歸り遊ばすと仰せらるゝのを、强ひて出かけやうとは……どうしても住吉に參ることは出來ない。』

『何！　どうしても出來ない！

生意氣な事を申すな。

人の仕事の邪魔をする奴は、こうしてくれやう。』

と申しながら、迎えの侍共は、無法にも手に持つ杖を以て、したゝかに若侍達を毆り付けて置いて飛ぶが如くに駈け出してしまひました。

お供の若侍は齒を喰ひしばつて、輿の行方を見守りながら、口惜しがりましたが、多勢に無勢、何とも手の下しやうもありません。

輿の中に居られました內侍は、この有樣を御覽になりまして、宛然夢に夢でも見るやうな氣持で、鬼にでも捕えられたかのやうに、聲を限りに救をお求めになりましたが、人里離れた山路では何ともすることが出來ません。

あはれ、大鷲に攫れた小雀の如き內侍の運命は果してどうなる事でございませう。

暮るゝに早い冬の日が、どつぷりと彼方の山陰に落ちて、枯葉を吹き卷くる金剛嵐は、身に泌みて寒うございます。

この時遙か彼方の山陰の谷道を、菊水の旗一流、吹く夕風に飜して、隊伍正々堂

〳〵と進んで來る、鎧武者の一隊がありました。

これこそ河内東條の帶刀楠木正行が、吉野行宮に急ぎの御用あつて、お召しにより參内する所であつたのであります。

正行の一隊が、河内國石川の邊まで進んで參りますと、

二三十人の武士が、一つの輿を中にして、とある木陰に立忍んで居ります其の樣子が、如何にも不思議に思はれましたから、正行は、

『夜分、誰方のお通りでございますか？』

と、尋ねますと、之が正行であるとは夢にも知らぬ師直方の武士達は、聲を和らげて、

『是は吉野の御局の御方が、深い御願事がありまして、夜中、急いで住吉樣にお參りに成る所でございます。』

と如何にも眞しやかに答へましたから、正行も左樣の事もあるものかと別に、不思議にも思はず、行き過ぎやうといたしました。

所が輿の中から女の泣聲が聞えて參りますので、正行は非常に怪しく思ひまして前後を圍んでゐる侍を押のけて、輿の傍へ立寄つて、お尋ねいたしますと、內侍には、泣く〳〵先の程からの仔細を仰せ有つて、どうか私を救ひ出してもらひたいと、仰せになりました。

正行聞いて大に驚き、之が辨の內侍であらうとは、今の今まで夢にも思つて居りませんために、早速部下に、

『それ此の狼藉者を悉く召し捕つてしまへ。』

と命じました。

『はつ！』

さあ、こうなつては一大事……。

師直方の侍も、今は一生懸命です。

『何！　狼藉者だと……。

折角、師直殿の命をうけて、此處まで奪つて參つた内侍を、おめ〳〵と今更どうして渡せるか？

奪ふなら奪つて見ろ、……』

と、一同腰なる一刀を引拔くが早いか、打つて懸つて參りました。

正行の部下も、この無禮者奴……

『免しておけば益〻つけあがる。さあ容赦はならんぞ。』

と、暫く、白刃が入亂れて戰ひましたが、どうして楠木方の勇士に、師直方の腰拔侍が敵ひませう。

其中三四人の者が討たれてコロ〳〵と、轉がつたかと思ふと、大方は散々ばら〳〵蜘蛛の子を散すかのやうに逃げ出してしまひました。

やがて正行は、松野を始め、生捕つた侍達に、

『一體、汝等は誰に賴まれて、斯樣な狼藉の事をいたすのじや。』

と、嚴しく尋ねました。

侍共は畏まつて、

『はい、どうも誠に恐入りました。命ばかりはどうぞお助け下さいませ。

實は私共の主人、高師直殿と三位行氏卿の北の方と申し合はせまして内侍樣をお連れ申せとの事でございました。』

と、有の儘を全然白狀いたしました。

×　×

誠に危き所を吉野藏王權現の御加護か、計らずも正行に救はれて、虎口を逃れられて内侍は正行に護られ、恙なく吉野の御殿にお歸りになり、今日の有樣を詳しく、天子樣に申上げましたから、天皇はたいさう正行の働きをお賞めになり、師直方の侍は皆首を刎ね、松野は尼にしまして、侍共の首を持たせて、

『三位行氏卿の北の方には、この事情をよく〳〵申すやうに。』

と、追歸へされました。

後で後村上天皇には、之を御緣に辨の內侍を、正行の妻に賜はるやう仰せられましたが、正行は何を考えたのでせうか、

いとも畏みまして、

とても世にながらふべくもあらぬ身の
かりの契をいかでむすばん。

と、申上げて、御辭退いたしました。

歌の意味は、到底何時迄も永くこの世に生きてゐる事の出來ない自分として、どうして假のお約束を結ぶことが出來ませうか、出來ることではないといふのです。

〔四〕至情塚

正行の活動をお褒めになりまして、辨の內侍を賜はらんとした、身に餘る有難い仰言も、一首の和歌に己が心の中を歌つて、御辭退申上げた、正行の心の中は、はたしてどんなであつたでありませう。

天皇にもお判りにならなければ、もとより辨の內侍にも判りません。

あはれ正行の心中を知るによしなき內侍は、女心の一筋に、唯々正行慕はしく、怨めしく、吉野の奧に佗しい日を送り迎えましたが、正平三年正月五日、正行が奮戰して四條畷の花と散つたとき、始めて歌の心を解した內侍は、如何に正行の尊い心に感激されたことでございませう。

皇城守護の大任を果すために、一切の私情を雄々しくも斷ち切つて、君國のために殉じた正行の崇高な精神！

毅然たる丈夫の態度！

洵に一代の精忠、正成の子として辱しからざるものでありました。

其の後、内侍は追慕の情やみ難く、遂に丈なす黒髪を斷ち切られて、吉野川の上流なる龍門の里に庵を結んで、霞棚引く春の朝、月影清き秋の夕、玉を轉ばす如き、讀經の響絶ゆる時なく、折々は閼伽の水汲まんとては、谷川に下り立つて、終生正行の菩提を弔らはれたといふことであります。

南朝の名花のあとや至情塚

吉野如意輪寺の境内に建てられた至情塚は、吉野朝の名花、辨の内侍の貞烈によつて、正行の壯烈な最後に一段の光彩を添えしめました、内侍の夫を思ふ至情を憫んで、後人の建てたものであります。

第一二篇　四條畷の戰

〔一〕　吉野の皇居に參内

攝津住吉、天王寺の敗報は、如何に京都を震駭させた事でございませう。之が越前や常陸であるとか、四國や九州であるならば、都よりは山河幾里を隔てゝ居ることですから、餘りに痛痒を感じないのですけれども、近く近畿の間に於て、故判官正成の忘れ形見であつて、しかも攝津、河内、和泉の地方に衆望を負つて立つ所の帶刀正行が屈起して、其の勢は眞に侮り難く、足利勢の猛將、細川、山名兩將までを手もなく打破つた鬼神の如き早業は足利方に取つては青天の霹靂でありました。

其の上、洛中には不思議にも火事が連日のやうに、彼方此方に起つて、尊氏、直義の周章狼狽方は宛然熱湯で手を洗ふやうだといはれて、直義の邸では、僧侶を招いて、戰勝の祈禱を行つたり、名もなき雜將を呼び集めたり、全く幕府をして、鼎の湧くやうな騷ぎを起さしめてしまひました。

愈々十二月二十八日になると、尊氏は高武藏守師直、同越後守師泰の二人を大將として、四國、中國、東山、東海二十餘ケ國の兵を率ゐて、河内に向はせることになりました。

師泰は部下の兵三千餘騎を率ゐて、淀に着きましたが、之を聞いて馳せ加はる人々には、武田甲斐守、逸見孫六入道、長井丹後入道、厚東駿河守、宇都宮三河入道、赤松信濃守、小早川備後守、都合其勢二萬餘騎、淀、赤井、大渡の百姓屋にも泊りきれず、堂舍佛閣にまで充滿てゐました。

師直は部下七千餘騎を率ゐて、八幡に着きましたが、此手に馳加はる人々には、細川阿波將監清氏、仁木左京太夫頼章、今川五郎入道、武田伊豆守、高刑部大輔、高幡磨守、南部遠江守、南部二郎左衛門尉、千葉之助、宇都宮入道、佐々木判官、佐々木六角判官、黒田判官、長九郎左衛門尉、松田備前の三郎、佐々木備中守、宇津木平三、曾我左衛門、多田院の御家人、源氏二十三人、外樣の大名四百三十六人、都合其勢六萬餘騎、八幡、山崎、眞木、葛葉、加島、神崎、櫻井、水無瀨の里に充滿て居りました。

斯くして一擧、河内を屠らんとするのであります。

實にや攝津の山河、風雲急を告げて、官軍の興廢眞にこの一戰にありとも申すべき、場合になつて參りました。

茲に於てか、此場合正行の取るべき態度といたしましては、退いて敵の鋭鋒を避け、金剛山麓、東條の險に據つてこの大敵を防ぐべきか、將又進んで疾風迅雷、敵を一擧に打碎くべきかの二途でありますが、正行は心私かに決する所がありまして、十

二月二十七日、舍弟正時以下一族打連れて、吉野の皇居に參内いたしました。

花に名高い吉野山も、流石に師走の末は木枯の音のみ高く、滿目荒涼たるものでありましたが、今しも山麓の九十九折なる道を、木の間隱れに菊水の旗一流れを、吹く山風に飜しながら、三百人許りの屈强の鎧武者が、隊伍肅々と進んで參りました。

この勇ましくも雄々しい武夫こそは、實に楠木帶刀正行を始め、死を覺悟した一族郎黨の人々であつたのであります。

やがて吉野の皇居に參内いたしまして、階の下に平伏しました正行は、中納言四條隆資卿を以て御暇乞を奏上いたしました。

『先臣正成は庶弱の身を以て大敵の意を碎き、後醍醐天皇の大御心をお休め申上げましたが、其の後程なく天下再び亂れて、逆臣尊氏は西國九州より攻め上つて參りました。

一旦緩急ある場合、命を捨てゝ義勇公に奉じますことは、かねて覺悟いたして居りました所でございますから、遂に攝州湊川に於て討死いたしました。

其時臣は歳が僅に十一歳に相成つて居りましたが、戰の場所には伴ひませんで、鄕里の河内に送り歸し、生き殘つた一族を扶けて朝敵を亡ぼし、再び君の御代になし參らせるやうにと、くれ〳〵も申し遺して出陣いたしました。

然るに爾來春秋廻ること十度、正行、正時も既に壯年となりました。

此の度の合戰に、骨を碎き、身を粉にして戰ひません場合には、亡父の申し遺しました言葉に違ふばかりでなく、武略の甲斐もない者よとの、世の謗りを受けることになります。

のみならず、生來病弱の臣は、若しも病に冒されまして、早世仕るやうの事がございますならば、それこそ、天子樣の御ためには不忠の臣となり、父のためには不孝の子となるのでございませう。

臣の常に憂ふる所は、實にこの儀でございます。

聞く所によりますれば、此度師直、師泰は雲霞の勢を率ゐて攻め上るとの事でございますから、全力を捧げて、彼等と乾坤一擲の合戰を仕り、彼等が頭を正行が手に取るか、正行、正時の首を彼等に取らするか、何れかに雌雄を決しやうと存じます。

就きましては、今生の中に今一度、天顔を拜み奉りませうと存じまして參内いたしました。』

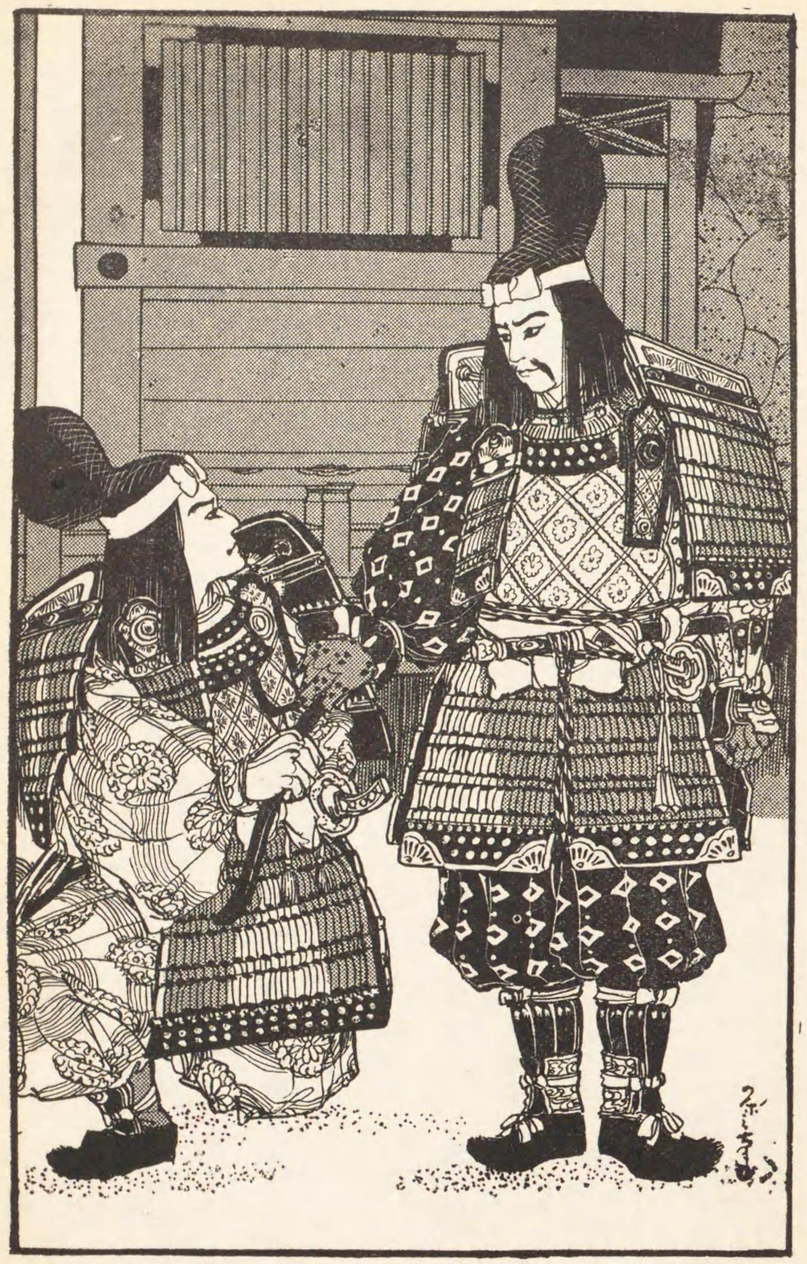
と、一語〳〵胸の奥底より迸り出づるかのやうに、申上げました。

この正行の言葉には、傳奏の隆資卿まづ直衣の袖を濡らしてしまひました。

天皇には、忝けなくも南殿の御簾を高くお巻き上げになりまして、玉顔いとも美しく、階の下、庭上に平伏して居ります士卒の上に、お目をとめさせられました。

そして正行を更に近くお召しになりまして、

以前兩度の戰に打勝つ事を得て、敵の心膽を寒からしめ、朕の心を慰むること、誠に



吉野の皇居に參内して正行正時兄弟名殘ををしむ

淺からず、累代の武名を發揚した事は、返すがへすも神妙に思ふぞ。

今や逆賊共は、大勢を盡して攻め上る以上、實にや天下の安危はこの一戰に關することゝ思ふ。

然しながら勝敗は戰の習であつて、進むべき時を以て進み、退くべき時に於て退くこそ、勇士の心とすべきことであつて、最後の勝利を得る道である。

朕は卿一人を以て、股肱と頼んでゐるのであるから、くれ〳〵も自重して、命を全うせよ。』

と、いとも有難き御情溢るゝ御諚を拜しました。

滿座、寂として聲なく、お傍に侍べる公卿も、居並ぶ庭上の勇士も、唯感涙に咽ぶばかりであります。

之を最後の參内と心に誓ふた正行正時の兄弟は、幾度か伏拜み、伏拜み御前を退出いたしました。

〔二〕 如意輪寺に殘す鏃の跡

泣く〳〵御前を拜辭しました正行は、花に名高い中の千本の谷を越えて、如意輪寺に參りました。

此處は北闕の天を望みつゝ、怨みを呑んで崩御になりました、後醍醐天皇の大神靈永久に鎭ります、塔尾の御陵であります。

正行は松風の音のみ高い御陵の前に額いて、しばし瞑禱いたしました。

『この度、師直、師泰兄弟打連れて攻め上るとの事でございますから、臣は彼等と乾坤一擲の合戰をいたしまして、上は天子樣の大御心を安じ奉り、下は亡父の怨を霽さんとの決心でございます。

どうぞこの正行の微衷をお汲みくださいまして、神靈の御加護を垂れさせ給ひますやう。』

にと、最後のお別れを申上げました。

斯くして、弟正時、和田新發意、舍弟新兵衞、同紀六左衞門、子息二人、野田四郎、子息二人、楠木將監、西河子息、恩地良圓、以下死を誓つた一族百四十三人の姓名を如意輪堂の壁に書き列ねて、其の奥に正行は鏃を以つて、

かえらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞ留むる

と、一首の辭世を書きつけて、更に各髻を剪つて佛殿に納め、一同感慨深氣に後を振り返り、〳〵つゝ、吉野の山を下つて、河内四條畷の敵陣へと向ひました。

〔三〕 四條畷の激戰

師直、師泰は淀、八幡に滯陣して正平三年の春を迎えました。

そして尙諸國から集る軍勢を待つて、河内へ攻め寄せやうと相談いたして居りましたが、噂によれば、

『楠木正行は既に着々と戰備を整へて、吉野の皇居に參内しては、最後のお暇を申し上げ、今日は河内國六萬寺村山地にある、往生院に到着したさうである。』

との事でしたから、今は一刻の猶豫もなりません。

師泰は正月二日に二萬餘騎を率ゐて、淀を出發し、和泉堺の浦に陣を取りました。

師直は翌三日の朝、六萬餘騎を率ゐて、八幡を出發して四條畷に着きました。

斯くて正月五日に於ける兩軍の形勢を考えて見ますのに、賊の大將高師直は、本營を野崎の陣に敷いて、輪違ひの旗を風に靡かせ、其の前後左右には、騎馬の武士、二萬餘騎、馬廻に徒立の射手五百人を備えて、十町四方を警戒させました。

更に二十町許前方の、飯盛山の山上には、縣下野守に、部下五千餘人を率ゐさして、物見の兵として備えました。

武田伊豆守は、部下一千人を率ゐて、四條畷から西方、瓢箪山にわたる平野に前進せしめて、正面から押寄せる楠木軍の襲撃を警戒させました。

佐々木隱岐判官入道高氏は、部下二千餘騎を率ゐ、生駒山の南の嶺に上つて、疊楯五百帖を立て並べ、射手八百人を控えさして、本營の左側前方の敵を警戒させました。

河津、高橋には其部下三千餘騎を率ゐさして、生駒山の北の峯に上り、側面から攻め寄せる敵を防ぎ其の他の部隊は、飯盛山の南端を占めて、後方より攻め寄せる敵に備へました。

師泰は、和泉、堺を占領して河内の石川河原を側面より攻撃し、そうして官軍の根據地たる河内の東條城を衝かんとして居りました。

思へば昨秋藤井寺以來、住吉、天王寺の合戰に、度々正行から辛い〳〵憂き目を見せられた賊軍は、斯くも警戒おさ〳〵怠りなく、官軍の襲擊を防ぎながら、除々に東條城に向つて、進擊しやうとしたらしいのであります。

之に對して、官軍の方では三軍を編成し、正行は第一軍の將として、部下三千餘騎を率ゐて、弟正時と共に、師直の本營に當り、東條城には弟次郎正儀を留めて、其の留守を守らしめました。

北畠親房卿は第二軍に將として、興良親王を奉じて、堺の師泰に對し、東條軍の左側防禦の任に當りました。

第三軍は四條隆資卿が將として、紀伊、和泉、河内の野伏を率ゐて、東條軍の右翼として、生駒、飯盛山上の敵にあたりました。

五日の朝の夜明頃、正行は弟の正時、和田新發意源秀、舍弟新兵衞高家等、屈强の兵三千餘騎を率き連れて、朝霧深く立ち籠めた中を、霜柱を踏み碎きながら、唯一筋に、大將師直の本陣を衝かうと、四條畷へ押寄せました。

飯盛山の山上にあつて、この有樣を見た、縣下野の守は、

『さあ愈々楠木勢が押し寄せて來たぞ。

あの菊水の旗を朝風に飜して進むのは、恐らく本陣に突擊するつもりらしい。

これは一大事だ！

者共進め――。』

と、山を馳せ下つて、楠木勢を遮るやうに、其の前方に現れて、破竹の樣な勢で、今しも進んで來た楠木勢と正面衝突をしてしまひました。

人觸るれば人を切り、馬觸るれば馬を切るといつたやうな、猛烈な三百餘騎の楠木勢のために、先づ眞先に進んだ、賊將の秋山彌次郎、大草五郎左衞門は射落されてしまひました。

續いて尾野七郎は、射向の袖を敲いて小跳しながら、進んで來ましたが、雨の降る

かの如くに東西より射る矢のために、内甲、草摺の外二所を射られましたから、太刀を倒に突いて、其の矢を拔かうとする所を、和田新發意つと馳せ寄つて、甲の鉢をしたゝかに打ちました。そして、倒れた所を駈け寄つた、和田の家來のために首を搔き切つて差上げられてしまひました。

是を軍の始めとして、五百餘騎の楠木勢と、徒歩の三百餘人の縣勢とは、喚叫んで相戰つて居ります中に、大方は汗馬のために蹴散らされて、縣下野守も、深傷五ヶ所も負つたために、之はとても敵はないと思つたのでせうか、討殘された兵をまとめて、師直の本陣さして引上げてしまひました。

四條畷の邊から瓢簞山にかけて、前衞として控えてゐた武田伊豆守は、この有樣を見て、七百餘騎を率ゐて、戰ひ疲れた楠木勢を追ひ散らさんと、進んで參りました。

後軍として控えて居りました正行の一千餘騎は二手に颯と分れて、この武田の軍勢を一人も餘さじと、攻め寄せました。

其の戰ひの烈しいこと、汗馬は東西に馳せ違ひ、握旗は南北に開き分れて、追ひつ返しつ、互に命を惜まず七八度迄も揉み合ひましたので、武田の七百餘騎は殘り少に討たれましたが、正行の後軍も大半は疵を蒙つて、血潮に染まつて居りました。

此時飯盛山の山上から、長崎彥九郎資宗、松田左近將監重明、須々木備中守高行等以下勝れたる兵四十八騎が、小松原より馳せ下つて、山を後に控え敵を麓に見下して、奮ひ戰ひましたが、楠木勢の後軍の千餘騎は僅かの敵に遮られて進みかねて見えました。

この時生駒山の南の嶺に居りました佐々木高氏は、三千餘騎を率ゐ背後より突擊しました。

腹背に敵を受けた正行の後軍は猶も勇を奮つて力闘しましたが、人も馬も漸く疲れて、大半は討たれ、大半は南を指して引き退きました。

この時正行、正時、源秀、正朝以下過去帳に名を連ねた所の決死の勇士百四十三人

は、皆前軍にありまして、一致團結、後軍の敗れたなどは少しも意にかけません。

正行は、

『目指す敵の大將師直こそ、後の方に控てゐるに違ひない。

さあ進んで勝負を決しやうではないか。』

と、殘兵三百餘騎を提げて獅子奮迅の勢で躍り入りました。

師直の部下は、楠木軍の小勢なのを見て侮り、之を討取らうと、細川阿波將監清氏は五百餘騎を率ゐて、眞先に進んで來ましたが、忽ち五十餘騎許り討たれて、北を指して退却してしまひました。

續いて仁木左京太夫頼章は、七百騎にて攻め寄せて參りましたが、楠木の三百餘騎は轡を並べて眞中に駈け入り、火花を散らして戰ひましたために、四方八方へ追散らしてしまひました。

千葉貞胤、宇都宮氏綱も亦、五百餘騎を率ゐて東西より、一時に押寄せましたが、正行は更に屈せず、三度合しては三度分れるといつた具合に、激しく戰ひましたので、敵は遁れてしまひました。

然し流石に戰ひは激しかつたと見えまして、楠木、和田の軍勢も百騎ばかりは討れて殘つてゐる者も、三筋四筋の矢の立つてゐない馬はないといふ樣な有樣ですから、今は已むなく馬を捨てゝ、田の畔に腰を下して、この强敵を前に控えて悠々と心靜に辨當を喰べました。

そして再び戰ふ機會を今か〳〵と窺つて居りました。

この落ち付き拂つた樣子を見ては、師直方の軍勢は皆驚き呆れてしまひました。

總大將高師直は、

『敵ながら驚き入つたものだ。

斯樣に必死を期した敵を取り籠めて討たんとするならば、どんなに澤山の味方を失ふことになるかも知れない。

之は後方の途を開いて退路を造り、決して攻め寄せん方が宜しからう。』

と、遠くに控えて攻め寄せる氣配もありません。

やがて、食事も終つて、暫く英氣を養つた正行始め一同は、また蹶然として立ち上つて、

『敵將師直は何處に在るぞ。早く來つて勝負を決せよ。』

と、口々に喚き叫んで、師直の本陣に近寄つていきました。

この樣子を見た師直の前後左右に控えてゐた究竟の武士、細川讃岐守頼春、今川五郎入道範國、高刑部大輔師茂、高播磨守師冬等は、七千餘騎を提げて我先に楠木勢を討取り、天晴れ功名手柄を表はさんものと押寄せました。

目に餘る雲霞の大勢も、死を期した楠木勢の前には、蠅の群程にも感じなかつたのでせう。

雨の如くに浴せかくる敵の矢は、互に鎧の袖を合はせ防ぎて、敵が近付けば鋒先を揃えて躍りかゝります。

眞先に進んだ南次郎左衞門尉は、馬の諸膝薙拂はれて、眞逆樣に討落され、松田次郎左衞門は和田新發意のために、長刀の柄を以て甲の鉢を打ちたゝかれ、更に内甲を突き刺されて、倒れてしまひました。

こんな具合で敵を倒すこと五十餘人、小腕を切られ、全身紅に彩らるゝ者二百餘人、烏合の衆七千餘人は、哀れにも僅か二百人の楠木勢に追ひ立て〳〵攻められて、中には淀、八幡を過ぎて、京都までも逃げる者もありました。

師直は部下のこの不甲斐なき有樣を見て、目を瞋らし、齒を喰ひしばつて、

『穢し返せ！

敵は小勢ぞ、師直こゝにあり。

吾れを見捨てゝ京に逃げ歸る者共は、何の面目あつて將軍にお目にかゝるか。』

と、大聲に呼ばはりました。

こうした所へ、土岐周濟房は部下を悉く失ひ、己れも膝を切られ、血に染まりながら、すご〳〵と師直の前を通りましたから、

師直は、

『日頃の廣言にずその有様は何事だ！』

と、言葉鋭く罵りましたから、周濟房は奮然として、

『何が見苦しい事がございませう。それならば討死してお目にかけます。

と、引返して敵の中に突入し、討死してしまひました。

× ×

師直の陣中は今や蜂の巣をついたやうな騒ぎです。

いくらなんでも、此處まで楠木勢が押寄せやうなどとは、夢にも思つて居りません

『オイ、拙者の太刀はどうした？』

『我輩の長刀もないぞ』

と、狼狽騒いで居ります。

此時、上山高元も師直の陣中に來て居りましたが、甲冑を身に着けて居りません。

之は困つたと思ひましたが、といつて己が陣所に歸る遑もなく、大變弱つて居りましたが、不圖傍を見ると、師直が着替のために、かねて用意してあつた、唐櫃がありましたから、思ひ切つて唐櫃の緒を引切り鎧を取り出して、肩にかけやうとしました。

之を見た師直の家來は、鎧の袖を抑えて、

『上山氏！　是は何となさる。

執事殿御着代えの品を、お許しもなく勝手に召さるゝとは……。』

と、力任せに引取らうとしました。

師直は從者を睨め付けて、

『汝こそ考えの足りない事を申すではないか。

この危急の場合、師直の命に代らんとする者に、たとへ千兩萬兩の鎧であるといつて、何の惜しい事があるか。

其處を退け！。』

と叱りました。

そして上山には、

『少しも苦しい事では御座らぬ。』

と、言葉を盡して賞めましたから、上山高元は感激して、急いで師直の鎧を着終りました。

この間に正行は荒れ狂ふ獅子のやうな勢で押し迫つて、早や師直と相距る半町位の處に來ました。

正行はいよ〳〵勇み立つて、

『よし！　今こそ多年の宿願を達する時が來たのだ。』

と、叫びながら、猛然として師直に迫りました。

師直の運命こそ、眞に風前の燈火といふのでありませう。

この時高元は躍り出して、師直の前に立塞がり、

『八幡殿より此方源家累代の執權として、武功天下に隱れなき高武藏守師直こゝにあり。』

と、刀を揮ふて矢庭に五人を斬り倒しました。

正行の兵はつと駈け寄つて、一擊して高元の首を討取つてしまひました。

正行が其の首を取つて檢べますと、如何にも太く淸げで、鎧を見れば、輪違ひを金物に透し彫にしてありますから、

『さては紛れもない武藏守師直を討取つたぞ。

多年の望今こそ達したのだ。

是を見よや者共！。』

と、餘りの嬉しさに、幾度も其の首を投げ上げては受取り、受取つては投げ上げて居りました。

正時も走り寄つて、

『兄上！

左様の事をなされては、折角討取つた首が損ひませう。

尚念のため、敵味方共に見せて、實否を確めやうではございませんか。』

と、首を太刀の先に刺貫いて、差上げながら、一同に示しますと、一人の部下が進み出て、

『それは師直の首ではありません。

確に上山六郎左衞門高元の首でございます。』

と申しました。

是を聞いた正行は、怒つたも怒るまいか、高元の首を地に叩きつけて、

『何と汝は怪しからぬ奴だ！

我君の御ために無類の朝敵だ！。』

と、足を擧げて蹴飛ばしました。

『然し汝も亦汝の主人、師直に代つた其の精神は、敵ながら立派なものだ。

雜兵共の首に雜ぜるなよ。』

と、着てゐた小袖の袖を引き斷つて、首を包ませ畔の傍に置きました。

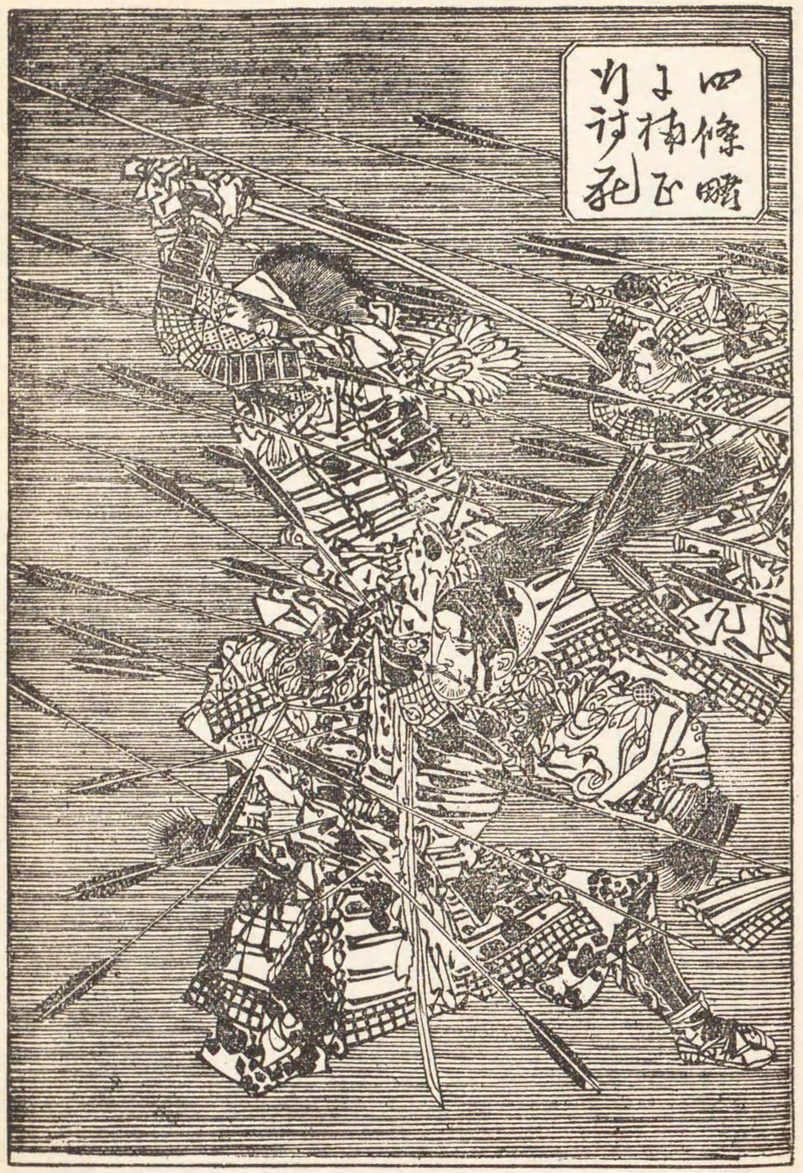
再び立ち上つた正行は、

『師直は何處にゐる。

今度こそ逃がしてなるものか。』

と、內甲に緘む鬢の髮の毛を押し退け、血眼になつて北方を望めば、輪違ひの旗を中にして、七八十騎の一團が居ります。

『おゝ彼處に見ゆる一隊こそ、きつと師直に違ひない。』



と、正行は奮然として進まうとしましたが、和田正朝は押し止めて、

『敵は騎馬で味方は徒歩です。

到底追ひ討つことの出來るものではありません。

むしろ佯り退いて敵を近くにおびき寄せ、急に取つて返して討てばこそ、其の方が彼師直の首を討取り易いでせう。』

正行も道理であると考えて、殘兵五十人許りと楯を負ふで退きましたが、疑深い師直はどうして之を追ひませう。

『きつと謀があるに相違ない。』

と、馬を仰えて追ひません。

此時高師冬は三百餘騎で、西方の田の中に居りましたが、

『それ楠木が逃げるぞ、

一人も逃がすな。』

と、追ひかけました。

しかしもとより強い和田、楠木のために返り討ちにあつて、忽ち五十餘騎も討ち倒され、這々の體になつて逃げだしてしまひました。

〔四〕 正行の最後

斯うしてゐる中に、またもや師直の姿を一町許先に見出した正行は、今度こそ討取らねばならんと、千里を一足に飛びかゝるやうな氣持で、勇みに勇んで進みましたが、如何せん、今朝の巳の刻（午前十時）から、申の時（午后四時）の終まで、三十餘度も戰つたのですから、今や正行主從は心身共に疲れて、其の上深傷、淺傷を負はぬ者は一人もありません。

心ばかりは矢竹に逸つても、騎馬武者を追つて討つことは出來ませんでした。

然し倒れる所までもと思ふ心を力に、正行、正時を始め、和田、野田、恩地良圓、河邊、石菊丸等は、師直目がけて吾先に〳〵と進みました。

之を見た師直は非常に驚いて、馬に一鞭あて、逃れやうとしました。

其時九州國の住人で須々木四郎といつて、強弓の矢繼早を以て其の名を知られた者が、

『防ぎ矢をいたしませう。』

と、其の邊に打捨て〳〵あつた人々の矢を拾ひ集めては、弓を滿月の如くに引き絞つて引き代え差代え、雨よりも激しく射かけます。

正時は飛び來つた矢に眉間を深く射られて、拔いて捨つる氣力もありません。

正行も亦左右の膝に三ヶ所、右の頰先左の目先を射られてまるで冬の野原に霜柱の立つたやうな有樣です。

殘る三十餘人の部下を顧るの時、三筋、四筋の矢の立たぬ者は一人もありませんでした。

日は既に西に落ちて飯盛山の麓、夕暗迫る四條畷の畔には、矢に貫かれ鋒に刺されて、戰死を遂げた敵味方の死屍が、累々として、鮮血は野邊を染めて、噎た凄愴の氣が漲つて居りました。

正行は全身血潮に彩られた、阿修羅の如き生殘れる勇士を顧みて、

『皆よく奮戰してくれた。

武運拙く四條畷の露と散るも、更に遺憾はないが、只一つ彼師直を討取り得なかつた事は、返す〳〵も殘念でならない。』

と、感慨深げに物語つた後、遙に南吉野の皇居を拜し奉つて、弟正時と刺し違えて、北枕に倒れましたから、殘りの兵士三十二人も、思ひ〳〵に腹搔き切つて、壯烈なる最後を遂げてしまひました。

和田新發意は如何にして紛れ込んだのでせうか、師直の部下の中に交つて、師直と

刺違えて死なうと近付きました所を、近頃河内國から降參して、師直の部下となつた、湯淺太郎左衞門と申す者が、之を見付て和田の後へ立廻つて、諸膝を切つて、倒るゝ所を走り寄つて頸を搔かうとしますと、和田新發意は朱をそゝいだやうな大きな目を見開いて、湯淺をはたと睨みつけました。

新發意の首は終に湯淺の手に討取られましたが、湯淺を睨みつけた眼は、決して塞がりません。

餘りに恐ろしかつたためか、湯淺はすつかり病氣になつてしまつて、仰げば和田の怒つた顏が天に見え、俯けば新發意の睨む眼が地に見えるといつた具合で、遂に七日目に湯淺は苦しみ悶えて死んでしまひました。

和田新兵衞正朝は、吉野の皇居に參內して、戰の樣子を具さに奏上しやうと、只一人馬にも乘らず、徒步で太刀を右の脇に抱え、左の手には敵の首を一つ提げて、東條の方へ落ちて參りました。

安保肥前守忠實は、只一騎後から聲をかけて、

『楠木、和田の人々は皆自害せられたのに、一人落ちらるゝとは卑怯ではござらぬか。

引返して尋常に勝負をいたしては如何でござる。』

と、呼ばはりました。

和田新兵衞はカラ〳〵と打笑ふて、

『引返して御相手仕るに何の苦しい事がござらう。』

と、血のついた四尺六寸の大太刀を打振つて走り懸りました。

忠實は一騎打の勝負ではとても敵はないと思つたのでせう。

馬に一鞭あてゝ逃げだしましたが、忠實が踏み止まれば正朝が逃げ落ち、正朝が留れば忠實が逃げるといふ具合に、追ひつ追はれつ一里ばかりも進んでゐましたが、青木次郎、長崎彦九郎の二騎の來ましたために、七筋までも矢を射立てられて、新兵衞

も亦忠實のために、首を取られてしまひました。

思へば吉野朝唯一の支持者として、昨秋以來强敵を打碎き、宸襟を休め奉つた我が楠木正行は、尙うら若き花の蕾の二十一歳を一期として、遂に吹き荒ぶ四條畷の嵐に散つてしまひました。

第一三篇　賀名生の行宮

〔一〕　師直の狼籍

楠木正行戰死の報が一度京都に達しますと、尊氏は萬歳々々と歡呼して喜び合ひました。

それだけ吉野の朝廷にとつては、非常なる一大打擊でありまして、統將を矢つた河内、和泉、紀伊方面の官軍は、眞に累卵の危機に直面したのであります。

虎狼のやうな賊將高師直、師泰は、更に進んで吉野に逼らんといたしました。

師泰は先づ六千餘騎を率ゐて、正月八日和泉堺浦をを發して、南河內郡石川河原に陣を取りましたが、正行の戰死と共に、和泉の官軍には最早戰ふ力もありませんか

ら、師泰は通り過ぐる所の、百姓家や、堂塔、伽藍を手當り次第に燒き拂つて、其の上磯長の聖德太子の御廟までも毀しては、掠奪を恣にして、楠木氏の根據地である、東條の城を攻めたのでありました。

師直は三千餘騎を引連れて、正月十四日大和平田莊を立つて、是亦途中到る所の民家に火を放ちながら、進んで吉野に向ひました。

師直の軍が愈々吉野の行宮に近附いたと知りました四條隆資卿は、急ぎ參內いたしまして御上に拜謁し、

『先日四條畷に正行を討ちました賊將師直は、更に進んで皇居を犯し奉るために、既に平田莊をを出發いたしたさうでござります。

防戰仕るべき兵のない今日、少しも早く賀名生の方へ御避難遊ばされました方がよろしうござりませう。』

と、申上げましたので、天子樣を始めまゐらせて、皇后、女院、內親王、宮々、公卿、僧正、僧都に至るまで、取る物も取りあへず夢に夢見る御心地に、賀名生を指して吉野の山をお逃れになりました。

たのむかひなきにつけても誓ひてし
勝手の神の名こそおしけれ。

とは、後村上天皇が、吉野山勝手神社の御前をお通り過ぎ遊ばされました時、御涙の中に千萬無量の感慨を神明に訴へ遊されました御歌であります。

眞に平和に治まる大御代でありましたならば、國を擧げて新春の喜びを謳ふ時でありますのに、逆賊四方に蔓つて居りまするために、至尊の御身を以て先帝の御時から實に十有一年も住み馴れ給ひし皇居を後にして、習はせ給はぬ道の岩根を踏み、重る山の雲を分けて、賀名生の奧にお迷入になる御心の中は果して如何でございませう。拜察し奉るさえ誠に畏き極みであります。

二十五日、遂に吉野山に押寄せました師直の軍勢は、三度も、

『ワーッ！』

と、鬨の聲を擧げましたが、山上は寂として何の手應えもありませんから、恐れ多くも行宮を犯し奉つて、火を放しましたので、皇居並に卿相雲客の宿所を始め、役の行者の開いた修驗道の靈場、金剛藏王の本堂、北野天神、示現宮、二丈一基の笠鳥居、二丈五尺の金の鳥居、伽藍、僧坊悉く燒き拂はれてしまひました。

師直、師泰の惡逆横暴は、眞に天人共に許さゞる所であります。

〔二〕賀名生の皇居

賀名生は大和國吉野郡賀名生村にありまして、吉野山を隔つること五里、宇智郡五條の南二里の所にあります。

高野、金剛、天の川、吉野の山々が其の四方を廻つて、全く人里離れた別天地の感じのする所であります。

延元二年、後醍醐天皇が夜密に花山院をお逃れになりました時も、神器を奉じてこの地に入らせられ、更に吉野にお遷りになつたのでありますが、此度後村上天皇も亦御臨幸になりまして、この地の豪族堀信增の岸上の館にお入りになりました。

其の後信增は、屋後の丘上に黑木の御所を御造營申上げて、お迎え申上げました。

賀名生は眞に山高く、谷深い所でありまして、鄕の外なる鄕、僻の中なる僻ともいはるゝ程の、邊鄙の場所であります。

從つて皇居と申しましても唯名のみで、いとも狹い柴の庵に、古びた竹の籬を廻らしてあるにすぎません。

珠玉かと見えるのは、軒の氷柱であり、錦かと思はるゝものは、庭の蘚苔であります。

峰の嵐はしば〳〵御膚を犯し奉り、溪川の流れは、幾度か御夢を驚かし奉る有樣

でありまして、天皇には、日夜御袖をのみ絞らせ給ふやうな、憂き月日をお送りになつてゐらつしやいました。

後村上天皇には土地の名を穴生と聞し召されまして、

『九重の宮に擬ふ所を、穴生とは相應しくない。

今より後は改めて、賀名生とこそ申す方が宜しからう。』

と、仰せになりました。

是より穴生は賀名生と稱えらるゝやうになりまして、疾く御望みのかなふやうにと一同開けゆく御代の御運を壽ぎ祈つて、御在になつたのでした。

〔三〕楠木正儀東條城にあつて師泰を防ぐ

正平三年正月五日、兄の正行が四條畷に於て花々しい戰死を遂げました其の後を襲ふて、楠木軍の首腦となり、上には四條隆資卿を奉じ、内には一族舊故を糾合して、東條の險によつて、皇軍のために萬丈の氣を吐いたのは、實に弟の楠木正儀でありました。

四條畷の戰後三日、即ち正月八日に和泉國堺浦を出發しました師泰は前にも述べました通り、途中民家に火を放つたり、掠奪をしたりあらゆる狼籍を逞しふして、吉野に進擊のため、正月十四日東條の城に向ひました。

然し正儀はよく自然の險阻を利用して、防ぎ戰ひましたから、どうしても師泰は東條城を落すことが出來ません。

其の上正儀は楠木軍得意の戰法である謀を以て、敵を惱ましましたから、河内の國の古市や石川河原には、毎日毎夜の如く激しい小競合が繰り返へされましたけれ共、一年半餘りも經つては、師泰の方の軍勢も心力共に全然疲れきつてしまひました。

正儀が斯うして必死になつて師泰を防いで居りまする時に、一方吉野の行宮を侵し

奉つた高師直は更に進んで佐々木道譽や武田氏信等を率ゐて、賀名生の背面を襲はうとしましたが、開住西阿、眞木野定觀、其他紀伊方面の武士達のために防がれて、之も亦非常な苦戰に陷り、佐々木道譽父子は負傷する等、散々に苦しめられて、再び平田莊に退陣してしまひました。

斯くて師直は、吉野朝廷を賀名生の窮地に陷れましたけれども、遂に賀名生を陷るゝ事は出來ずして、

『大和地方は全く平定し、兇徒數百人も亦叛かなくなつた。』

などゝ揚言して如何にも誇り顏に京都に引揚げて參りました。

吉野朝廷の柱石と仰がれた楠木正行が、四條畷に玉と碎けた後に於て、眞によく最後の安全地帶とも申すべき、賀名生の天地に皇運を扶翼し參らすることが出來ましたのは、楠木正儀の力でありました。

それでありますから楠木氏の本據である、東條の堅壘は依然として吉野朝廷の守りであり、勤王の大旆として、菊水の旗風は東條城頭に鮮かに飜つて居りました。正儀は正行の後を承けて、左衞門少尉に任ぜられ、且河內守となり、更に累進して左馬頭參議に任ぜられました。

第一四篇　直義と師直の爭

〔一〕師直、師泰の我儘

吉野の朝廷を賀名生の奥にまで追落して、一先づ外敵の憂ひを絶つた足利氏は、茲にはしなくも、内部より燃え上つた爭ひの炎に、苦しまねばならなくなりました。

この内部から燃え上つた炎こそは、實に直義と師直の爭ひでありました。

元來尊氏は己れの正しからぬ望を達するために、多くの武士を集めたのでありますが、あらゆる利慾を以て、之を誘ひ、之に對しては出來得る限り寛大にしましたために、自然部下は我儘の振舞が多くなつたのであります。

とりわけ尊氏とは同族である名望家の家に生れ、尊氏の執事として、尊氏の信任の

最も篤かつた、高師直、師泰兄弟は、己れの權勢の高まると共に、不遜の振舞が日一日と激しくなつたのですが、今や吉野の官軍を討ち破つたといふ所から、いよ〳〵心奢つて益々我儘に振舞ふやうになりました。

京都の一條今出川の師直の住居は、質素なる鎌倉武士の住家としては、如何にも似合はしからぬ、全く御殿のやうな構でありまして、庭園等には、吉野の櫻であるとか、宇津の山邊の楓であるとか、それは〳〵名所〳〵の風景を拵えてあります。

弟の師泰が、東山の枝橋といふ所に、己れの別莊を作らうと思つて、此地の持主である、北野の長者菅宰相在登卿に、

『この土地を讓つて貰ひたい』

と申しました所、在登卿は、

『この地を御山莊のために、お使ひになることは、少しもお差支へございませんが、たゞこの地は當家の父祖代々の墳墓の地として、五輪を立て、お經を奉納した所で

ございますから、どうか其の墓印だけは、他所へお遷しになりませんで、元の所にお止め置きくださいますやうに』

と、頼みましたが、師泰は無法にも、人夫五六百人を遣はして、山を崩し、木を伐捨てゝ、墓などはすつかり堀崩して捨てさしてしまひました。

餘りの亂暴な仕業に、見る人も見兼ねたのでせう。

誰の仕業か、引ならした土の上に、

『無人の驗の卒都婆堀棄てゝ、墓無かりける家作りかな。』

といふ歌を書いて、捨てゝ置きました。

之を見た師泰は、

『是は實に怪しからぬ、きつと菅宰相のした事であらう。』

と、人をして此の宰相を殺さしてしまひました。

こんな風ですから、今年の春も東條城攻撃のために、石川河原に陣を取つて、近邊を管領した時などは、諸寺、諸社の所領の知行は、一ヶ所の本主に宛付ないで、全部自分が取つてしまひました。

特に天王寺の常燈料の庄の知行までも取上げてしまひましたために、お寺では燈火を燈すことも出來なくなつて、七百年この方一時も更に消ゆることのなかつた、佛法常住の燈火も、終には消え果てるやうになつてしまひました。

〔二〕重能と直宗の讒言

此頃足利直義の執事に上杉伊豆守重能と、畠山大藏少輔直宗の二人がありました。

二人共餘り賢くないのに、官位は人よりも高い事を望み、さしたる功も立てないのに、恩賞は世の人に越えるやうにと望んで居りましたから、今や師直、師泰が、尊氏の執事として、人を人とも思はぬやうな振舞を見ては、非常に憾み嫉んで居りまし

た。

そして少しでも師直、師泰に落度があれば、直ぐに其を取立てゝは、尊氏、直義に讒言をして居りました。

然し尊氏も直義も、

『若し師直、師泰兄弟がゐなかつたならば、誰がこの亂れたる天下の亂を鎮める者があらうか』

と申して、少々の咎は耳にも入れませんでした。

それがため重能も、直宗も常に心が平靜でありません。

前にも申しましたやうに、直義は兄の尊氏と共に、天龍寺等を建立しては、心から禪宗を信仰して居りましたが、この直義の最も信頼してゐる坊さんに、大休寺の妙吉といふ坊さんが居りました。

直義は日夜、一條堀川の妙吉の許に通つては、佛學の研究に、法話の談論に、師の教を受けて居りました。

之に反して師直、師泰兄弟は、萬人の尊崇類ひなき、妙吉の智慧才學を疎んじて、妙吉に對しては少しも敬意を拂ひませんために、自然妙吉も亦、師直、師泰の事を善くは思ひませんで、

『如何にも師直、師泰二人の振舞は穩でない』

と申して居りました。

之を聞いた、重能、直宗の二人は非常に喜んで、

『師直、師泰兄弟を讒言して亡き者にするには、この僧より增さる人はあるまい』

と、考えて、其以來は二人は妙吉の門に頭を低くし、媚を厚くして、ひたすら、師直、師泰の事を惡樣に申して居りました。

妙吉は直義といつも佛教の話をします時に、得意の辯舌を以て、直義のために、師直、師泰兄弟が、

『非を理にし』
『下として上を犯す科』
を述べまして、
『彼等を其の儘にして置いて、天下何れの時か靜謐を期することが出來ませう』
と申しますので、遂には直義も、心の中に密かに期する所があつたのであります。

〔三〕師直誅伐の相談

いよ〳〵妙吉の勸めによつて、
『師直兄弟を誅伐しやう』
との決心をしました直義は、竊に家來の上杉重能、畠山直宗、大高伊豫守、粟飯原下總守、宍戸安藝守、齊田五郎左衞門達を、呼び集めまして、内々師直兄弟を誅伐する相談をいたしました。

直義は一膝膝を進めて、
『いよ〳〵、近日の中に師直を招く考えであるから、其席で大力無双の大高伊豫守と、物馴れた剛の者の、宍戸安藝守とは、よい時を見計つて、師直兄弟を組伏せてもらひたい。
萬一手に餘る場合は、討洩らさぬ用心に、屈竟の者百餘人に、物具させて竊に隱して置くから、……
確りやつて貰ひたい』
『承知いたしました。
手ぬかりのないやうに、討取つてお目にかけませう』
やがて其の日になりますと、直義方に斯樣に恐ろしい計畫のあらうなどとは、夢にも知らない師直は、附從つて參りました侍達を、門外の大庭の方に待たして置い

て、師直只一人、通された客殿に入つて參りました。

あはれ師直の命は、風を待つ露よりも、危いものでございます。

所が粟飯原下總守清胤はどうしたのか俄に心變りして、師直に吃と目配せをしました。

元來すばしこい師直の事でございますから、直ぐにそれと悟つて、一寸席を外すやうな風をして、外へ出てしまひました。

そして門前から馬に乘るが早いか、一目散に自分の家に歸つてしまひました。

其晩になりますと、粟飯原、齊藤の二人は師直の所に參りまして、直義を始め、上杉、畠山の隱謀を詳しく物語りましたから、

『さては直義奴！　人を亡き者にせんとたくらんだか、よし！　先方が其様な考なら、こちらにも覺悟がある』

と、申して、いよ〳〵直義誅伐の復讐に取りかゝりました。

去年の春から河内の東條を攻撃するために、石川河原に滯陣して居ります弟の師泰を、紀伊國の守護畠山清國と交代さして、急ぎ京都へ呼び戻しました。

遂に師直は執事を罷められてしまひました。

〔四〕　師直、師泰大兵を率ゐて尊氏の邸を圍む

斯くて八月の初になりますと、師直、師泰兄弟は、多くの兵を集めましたので、直義も亦兵を集めて、之に對抗するといふ有様で、數萬騎の兵は京都の町を東西に馳せ違つて、馬の嘶、草摺の音は鳴止む隙もなく、今にも戰爭が始まるといふ噂に、町中は非常な大騒ぎとなりました。

直義の方に味方しました武士は、吉良滿義、吉良滿貞、石堂頼房、細川頼春、細川顯氏、畠山直宗、上杉重能等、であつて、都合七千餘騎を以て邸の内外を固めました

た。

師直方に馳せ加はりました武士には、山名時氏、今川頼貞、吉良貞經、仁木頼章、桃井義盛、畠山國頼、細川清氏、土岐頼康、粟飯原清胤等を始めとして高家の一族は申すに及ばず、畿内近國の兵が寄り集りましたから、其の勢は五萬餘騎にもなつて、一條大路から今出川にかけて充滿て居りました。

やがて尊氏は直義の所に使を遣はしまして、

『師直、師泰が身に餘る奢侈僭上の振舞をなして、其結果は主從の禮を紊すといふ事は實に季の世とは申し乍ら遺憾の至りである。

この上は勢に乘じて、押寄せるやうな事があるかも知れないから、急いで當方へお越しになつた方が宜しからう』

と、申しましたから、早速直義は集つた兵士達を引連れて尊氏の高倉の邸に遁れました。

八月十三日の卯刻に師直と子息の師夏は、雲霞の如き大軍を率ゐて、十重二十重に高倉の邸を圍み、越後守師泰は七千餘騎を率ゐて搦手の方に廻りました。

尊氏と直義は、假令師直、師泰が押寄せる事があつても、防戰などいたしては反つて恥辱であると考えまして、萬一の場合を覺悟して、小具足ばかりを身に付けて靜りかえつて居りました。

然し師直、師泰とても、流石に押寄せる氣配もなく、徒らに時を過して居りました。

尊氏は須賀壹岐守を使として師直に、

『我が祖、義家朝臣天下の武將たりしより以來、汝が祖先は當家累代の家臣として、未だ曾て一日も主從の禮儀を亂した事はない。

然るに一旦の怒を以て、身に餘る恩を忘れ、平和の裡に事を解決する事を考えずに、大軍を起して東西を圍むなどといふ事は、是は尊氏を輕んずる結果であらうけれ共、所詮は神佛の譴を遁るゝ事は出來ないのである。

若し心の中に憤る事があるならば、汝の所存を申述べればよろしからう。然しながら萬一にも讒者の言を信じて、國家を奪はうとする樣な企てならば、此上意見を聞く必要もない、自分は白刄の前に我命を止めて、黄泉の下に汝の運命を見るであらう』

と、道理を盡して吃と申しました。

師直は、

『いや〳〵是程までの御言葉を承らうとは思ひません。

實は直義殿が讒臣の申す所を御承引になつて、師直共一族を亡ぼさうとのお企でありましたから、自分の誤らない所を申し述べて、讒言をした者を賜はり、後の人々の惡習を懲らしたいためでございます』

と、答へて旗の手を一同に颯と下させ、楯を一面に進めて、返答如何にと待構えて居りました。

尊氏も愈々決心をして、

『累代の家臣に圍まれて、乞はるゝまゝに下手人を出す大馬鹿者が何處にある。

此上は尊氏天下の嘲笑を一身に替へて討死いたさう』

と、御小袖といふ鎧を取つて着ましたから、堂上堂下に集つてゐる兵士達は、甲の緒をしめ、色めき渡つて是こそ天下の一大事と膽を冷しました。

直義は尊氏を宥めて、

『彼等師直、師泰の仕業が餘りに分限を過ぎるによつて、一度懲戒をいたして置かうといふ事を傳へ聞いて、其の結果、今日のやうな狼藉を企てるといふことは、當家の恥辱、武略の衰微、是に過ぎたる事がございませう。

然し元々此の禍は、彼等が直義を怨むだ事でありますから、此事に對しては輕々しく防戰などはなさらぬ方が宜しふございませう。

萬一にも此際師直共が忠義を忘れ、逆威を振ふやうの事があつては、一家の武運

は全然地に墜ちて、天下の大亂となる事は火を睹るよりも明かな事でありますから、師直の請ふまゝに、讒言をいたした者を遣はして、成可く事を穏に取計らふ様にいたした方が宜しうございませう』

と申しましたので、尊氏も直義の申す所、實にも道理であると考えて、已むなく翌年、重能、直宗を越前へ配流に所し、直義の政務を止めて、義詮をして代らせる事にしましたから、師直は大悦びで圍を解いて歸りました。

重能と直宗の二人は配所で僧侶になつて居りましたが、後に師直の部下に殺されてしまひました。

〔五〕 直義吉野の朝廷に歸順する

京都に於ける直義、師直の爭ひは、兎に角一段落を告げましたが、然しこれは表面だけの事であつて、むしろ其の爭ひは、深みと強さを増したと申さねばなりません。

直義の甥にあたる直冬（尊氏の庶長子）は正平四年の四月に長門の探題として任地にありましたが、此度の直義、師直の爭ひのために、師直の仲間の者に攻撃せられましたので、舟でもつて四國に渡り、それから九州に入つて、肥後の川尻の方に逃れて行きました。

此頃九州では、少貳頼尚が九州探題一色範氏と仲を惡くして、九州に於ける足利方は自然二つに別れて居りました。

直冬は此機に乘じて、九州諸國に檄を飛ばして、武士を招きましたから、官軍にも就かず、幕府にも快くない武士達は續々として集つて來ましたので、直冬の勢は中々に強く、九州の天下は、官軍方、幕府方、直冬方の三つに分れる事になつて、其の爭ひは絶ゆる時がなくなりました。

斯様に足利直冬の勢力は、九州を風靡したばかりでなく、中國の方面でも長門の

守護の厚東氏や、毛利親胤や、大内弘幸が其の下に馳せ參じて、其の勢は仲々侮る事が出來なくなつてまゐりました。

そこで尊氏は、自ら出發して九州を鎮定しやうと思ひ立ち、嫡男の義詮をして京都を警衛せしめ、自らは師直等を率ゐて、十月二十八日京都を發し、途中石清水八幡に參詣して、翌月の十八日には備後の三石に到着しました。

尊氏が京都を立つて九州に下ると云ふ二日前、正平六年十月二十六日の夜、直義は窃かに京都を遁れて、大和に赴き越智伊賀守に賴り、更に河内に奔つて、畠山國清の石川城に入りました。

そこで書を近畿の同志に送つて、師直、師泰追討の兵を募りました。

すると桃井直常とか、石塔賴房とか、日頃高氏一族の驕慢を憎むでゐる者は、皆直義に應じましたから、直義軍の氣勢は一時に大いに揚がりましたので、京都の上下は頗る周章狼狽を極めました。

越智伊賀守は、

『大和、河内、和泉、紀伊國は皆吉野の王命に順つて、今更武家に附從ふとも思はれませんから、此際是非共吉野朝のお味方に參つて、先非を悔ひ改め、後々の榮えを計るやうになさいました方が宜しうございませう』

と勸めましたので、直義も茲に意を決して、吉野朝廷に歸順の意を表して參りました。

吉野の朝廷に於きましては、この直義の申出に對して、如何取計ふべきかについて諸卿が參内して御前會議が開かれました。

洞院實世卿は先づ第一番に膝を進めて、

『直義の申す所は、甚だ以て僞でございませう。

譜代の家人師直、師泰のために都を追出されて、天涯地角、身の置く所が無くなりましたから、聊か天威を借りて、己れが宿意を達せんために、天聽を掠め奉る者

でございませう。

二十餘年の久しい間、上御一人を始め參らせ、百官有司悉く、幾多の辛苦を嘗めらるゝのは、之皆すべて彼直義の惡意によるのではありませんか。

今幸に彼が朝廷に降るといふ事は、之は實に天の與ふる所でありますから、此時に乘じて誅伐しませんでしたならば、後の禍、臍を嚙むとも及ばないでありませう。

只速に討手を差遣して、首を禁門の前に晒した方が宜しうございませう』

と申しました。

關白左大臣二條師基卿は、

『心から罪を悔ひ改めて謝する者は、誠心を以て事を盡しますから、忠誠を懈る者ではありません。

今日直義が御味方に參ると云ふ事は、天下を治めて君の御代となし奉るために、是以上の好機會はありますまいと信じます。

此際是非共、彼直義の元弘の際に於ける舊功をお捨てにならず、官職に復して召仕はるゝに越す事はありますまいと存じます』

と、之はまた實世卿とは全然反對の意見を述べられました。

何れも理非を盡して熱心に說きますので、何れを正しい事として宜しいか、席に列つた公卿達も判斷に苦んで、言葉も出さず、唯四邊を見廻すのみでありました。

やがて北畠親房卿は、

『實世卿の申さるゝ所も至極最もと存じますが、此際は直義の申す所をお許しになりましたならば、萬機の政を天下に施されます上に、都合の良い事が多多ございませう。

御聖德が廣く行き渡つて、士卒が悉く歸服しましたならば、自ら皇威は彌榮えに榮えまして、逆臣を亡ぼさるゝ事もいと容易いことでございませう』

と言葉巧に申されましたから、其の他の公卿達も成程と賛成して、遂に直義に對して、勅免の宣旨を下されました。

然し直義の歸順は、固より彼が困つた揚句の僞つた謀であつた事は申すまでもありません。

〔六〕直義遂に尊氏、師直を討破る

直義の歸順が適ひますと、和田、楠木を始めとして、大和、河内、和泉、紀伊方面の官軍方の武士達は申すに及ばず、京都近郷の武士達も皆直義の許に馳せ參つて、今にも京都に攻め登るといふ樣な噂が聞えて參りました。

河内にあつた直義は、細川顯氏と相談して、十一月二十九日、使を備前の軍旅にある尊氏の許に送つて、

『直義此度の擧兵は、只々師直、師泰に對して憤るのみであつて、決して、他念は無いのであるから、どうか兄上も私に力を協して、師直、師泰を討つていたゞきたい』

と申しました。

官軍の後援を得て京都に向つた直義は、石塔頼房を八幡に向はしめましたから、京都は非常に狼狽して、義詮は早馬を以て、急を尊氏の許に知らせて參りました。

其の中に淀、八幡附近には、續々として直義の軍が到着いたしますので、義詮は佐々木道譽や、仁木義長をして、極力防がせましたが、京都の軍勢は兎角壓迫され勝でありました。

明れば正平六年正月になりますと、越中の守護として北國に活動して居りました、桃井直常は、能登、加賀、越前の軍勢七千餘騎を引連れて、夜を日に繼で攻め上つて來ました。

折柄正月の初めでありましたために、途中は雪が夥しく道を埋めて馬の足も立ちませんでしたから、兵士を皆馬から下して、轡を懸させ、二萬餘人を前に立てゝ、道を踏ませて過ぎました。

すると山路の雪は皆踏み固められて、鏡の如くなりましたために、中々馬の蹄を勞せずして、七里半の險しい山路もいと樂々と越える事が出來て、比叡山の東坂本に着きました。それがため、京都の驚きは、益々烈しくなつてきました。

斯くて直義は八幡の軍に加つて、叡山に於ける桃井軍と相呼應して京都を陷れやうとして、一齊に諸軍に向つて、師直、師泰の誅伐の命令を下しました。

十三日になりますと、桃井直常は叡山から雲母阪を馳せ下つて洛北に出で、到る所に火を放しましたので、義詮も今は京都にゐたゝまらなくなつて、上洛の道にある尊氏の軍に合するために、十五日の朝早く京都を逃れ出してしまひました。

心細くも都を落た義詮が、京都の西の桂川の邊を渡つて、向日の明神の前を南に過ぎやうとします時、遙かに馬煙を夥しく立てゝ、二三十流の旗を飜しながら、小松原から懸出した軍勢がありました。

義詮は若しか八幡から搦手に廻る直義の軍勢ではないかと驚きましたが、是は尊氏と師直とが、山陽道の軍勢二萬餘騎を引連れて參りましたので、義詮はまるで地獄で佛に會つたやうな悅ばしさで、直ちに桃井を攻め落せと都を指して引返しました。

尊氏方は軍勢を三手に別けて、二條河原、四條河原で激しく戰ひましたが、山名時氏を始めとして、多くの諸將が直義方に附きましたために散々に破られて、尊氏、義詮は僅かの兵を率ゐて、丹波に遁れ、更に道を轉じて播磨に走り、書寫山に據りました。

やがて八幡からは、石塔頼房が五千餘騎を率ゐて書寫山に押寄せて參りましたが、此時既に書寫山には、越後守師泰が、大勢で援軍のために來てゐると云ふ事を聞いたために頼房は、一先づ播磨の光明寺に陣を取つて、更に八幡の方へ、援軍を乞ふて參

りました。

此の様子を知つた尊氏は、光明寺の軍勢の多くならぬ前に追ひ散らしてしまへと、一萬餘騎を率ゐて光明寺の四方を取卷きました。

何しろ光明寺の城中には、命知らずの武士共が玆を先途と命を捨てゝ戰ひますのに、寄手は功のみ徒に高く祿を貪る事の多い大名共が、只味方の大勢を頼む許りで、好加減に軍をして居りますから、少しも勝つ事が出來ません。

寄手の中に播磨の白旗城の城主赤松律師則祐と申す者が居りましたが、美作より敵が起つて、播磨の赤松の城へ攻め寄せると云ふ噂がありましたので、急いで光明寺の陣を引拂つて、白旗城へ歸つてしまひました。

軍の習として、一騎でも勢の加はる時は、人の心は自ら勇み立ち、一人で少くも缺ける時には、兎角士卒の意氣の沮喪するものであります。

昨日今日の様に寄手の軍勢が、次第々々に減るのを見ては、全然力を落した師直の部下達が、唯幕の中に休息して居りますと云ふと、巽の方から怪げな雲が一叢立出でゝ風に吹かれてふわり〳〵と舞揚りました。

そして其の下には幾萬か數えきれない程の、鳶や烏が飛び舞つてゐるかの様に思はれましたが、近附くに從つてよく之を見れば、雲でもなければ、霞でもありません。

無紋の白旗が一流、天から舞ひ落ちたのであります。

是は八幡大菩薩が手を加え給ふ奇瑞であるに違ひない。

此の旗の落ちて留まる方こそ、軍に打勝つであらうと、寄手も城中も、

『どうか此方へ落ちますやうに』

と合掌して祈念しない人もありませんでした。

この旗は城の上に舞上つたり舞下つたりして、しばらく翩翻として居りましたが、やがて梢の風に吹かれて、又寄手の上に翻りました。

數萬の軍勢は一様に頭を地にすり附けまして、

『何卒吾陣中に下らせ給へ』

と、信心を凝して居りますといふと、其の中に飛んでゐた鳥は四方八方に飛び散つて、旗は忽に師直の幕の中に落ちました。

一同は聲を擧げて、目出度々々と喜んで居りましたが、其の中に師直が冑を脱いで、左の袖に受留め三度禮をして、委しく之を見れば、旗かと思つたのは旗ではなくて、何でもない反古紙を二三十枚續き合はせて、裏には二つの歌が書いてありました。

吉野山峯の嵐の烈しさに
　高き梢の花ぞ散り行く。
限りあれば秋も暮れぬと武藏野の
　草はみながら霜枯れにけり。

高き梢の花ぞ散り行くとあるは、高家の人々の亡ぶぞと云ふ事を意味し、武藏野の草はみながら霜枯れにけり、と申すのも、武藏守の一族の亡ぶといふことで、何れも師直にとつては、不吉の歌なので、師直方の者共は、

『何だ人を馬鹿にして……』

全然落膽してしまひました。

一方何時まで攻めても、光明寺の城は固くして落ちません上に、八幡の城からは更に畠山國淸の率ゆる援軍が到着すると云ふので、尊氏も、

『險はしい山城を攻むればこそ、叶はないのであつて、敵に十倍する兵力を持つ味方が、若しも平野で勝負を決するならば、それこそ勝事疑ひなし』

と、遂に光明寺を捨てゝ兵庫の湊川へ向ひました。

石塔頼房も亦光明寺城を打捨てゝ湊川へ打つて出ましたために、打出の濱に於て、兩軍の激しい戰は開始されましたが、師直は股に矢を受け、師泰は内甲を射拔かれて、散々の目に遭つてしまひました。

茲に於て尊氏も到底直義に勝つ見込のないことを覺つて、饗庭氏直を使として、直義との間に和議が成立ちました。

それには師直、師泰以下の家來を出家さして、死を免れさせるといふ事でした。

〔七〕師直、師泰の最後

二月二十五日、尊氏は禪僧の衣を身に纏ふた師直や、念佛行者の衣を着た師泰を伴ふて、兵庫を出發しましたが、折から春雨がしめやかにしと〳〵と降つて、數萬の敵が此處彼處に止つてゐる中を通るのですから、氣が氣ではありません。

成るべく人に見知られまいと、態々蓮の葉笠を打傾けて、袖で顏を引隱しますけれども、中々人目を避ける事は出來ませんでした。

尊氏に離れたのでは、途中でどんな辛い目に遭ふかも知れないと、馬を早めて進んで居りましたが、先に師直のために殺された、上杉重能の子供の、上杉憲能の兵共が、前から相談してあつた事と見えまして、路の兩側に百騎、二百騎、五十騎、三十騎と控えて居りましたが、

『それ執事が見えたぞ〳〵』

と口々に云ひながら、尊氏と師直との間を隔てるために、わざと馬を乘入れて參りました。

そのため心ならずも、二人の間は押隔てられて、武庫川の邊を通る頃には、最早山を隔て、川を隔て、其の間は五十町許になつてしまひました。

師直、師泰が武庫川を打渡つて、堤の上を通る時、三浦八郎左衞門の部下が二人走り寄つて、

『こゝなる遁世者の顏を隱すは何者か、其の笠を脫げ！』

といつて、師直の着けてゐた蓮の葉笠を引切つて捨てました。

そして頬被が外れて、横顔の少し見えた所を、三浦八郎左衛門は、

『これこそ願ふ所の怨重なる敵である』

と悦んで、長刀の柄を取延て右の肩先から左の小脇まで鋒下りに切り付け痛手に堪えかねて、師直の馬よりどうと落ちた所を、三浦はすかさず馬より飛下りて、首を討取つてしまひました。

師泰は半町許隔てた所に居りましたが、是の有様を見て、馬に一鞭あてゝ懸けのけんとしました所を、三浦の後に續いた吉江小四郎が、鎗を以て脊骨から左の乳の下へ突通して、馬から落ちた所を、之亦首を取つてしまひました。

其の他の者も皆夫々哀れな最後を遂げました。

斯くて幕府の執事として、權勢の並びなかつた高師直兄弟も、あはれ武庫川一片の露と散つてしまつたのであります。

第一五篇　尊氏と直義の爭ひ

〔一〕　尊氏吉野の朝廷に降る

正平六年二月二十七日、尊氏は島流しにでも會つた人の樣に、意氣悄沈して京都に入つて參りましたが、それに引代えて直義は其の翌日意氣揚々と京都に乘込んで參りました。

そして義詮を輔けて、元の通りに政務を見ることゝなりました。

仲直りをした三人は打連れ立つて、或時は京都の西の嵐山に花を眺めたり、或時は夢想國師の法談などを聞いたりして、如何にものんびりしたものでありましたが、然し三人の間柄は最早昔のやうに打解けて親しいものではありませんでした。

直義と師直の衝突は、實は尊氏と直義との反目に外なりません。

それですから、むしろ此度の師直兄弟の死によつて、直義兄弟の爭ひは、更に〳〵深く强くされたものと見ねばなりません。

師直兄弟を殺した、上杉顯能の所分についても、尊氏は之を憎んで殺さうとしましたが、直義は反つて之を救つて流罪にしてしまひました。

前にも述べました樣に、直義が兄の尊氏と爭つて、吉野の朝廷に降りました時、直義は吉野朝と北方（尊氏の勝手に擁立した天皇）とのお仲直りを進め、今日となつても其の考えは捨てて居りません。

楠木正儀も亦、この直義の意見には贊成して、大いにその實現に努めましたが、北畠親房卿等の强硬な反對に遭つて、ものになりませんでした。

兄の尊氏はこの直義の意見には全然反對であつたものですから、この問題を中心にして、二人の間は非常に仲が惡くなつてしまひました。

偉大な人傑!!楠木正儀公

從つて尊氏黨である細川頼春、仁木義長、赤松貞範、等の諸將と、直義黨である畠山國清、桃井直常、石塔頼房等とは、全く睨合ひの形となつてきまして、遂に是等の諸將は續々として京都を引き揚げて、各々自分の國に歸り、其の外武家方であつて、吉野の朝廷に歸順する者も續々と現れて來ました。

そこで尊氏は、近江に據つて背いた佐々木道譽を討つために自ら兵を率ゐて出發し、義詮は吉野に歸順した赤松則祐を討つために播磨に出發しました。

こうして尊氏父子が、東西に別れて京都を出發した事は實は、直義を討つためであると、直義に說く者がありましたために、直義は全然其を信じて、遂に意を決して、七月の晦日に京都を遁れて、北國に走つてしまひました。

桃井直常、上杉朝定、山名時氏、畠山國清等も亦、之に附き從ひましたから、天下は再び、官軍、尊氏、直義の三方に分れて、鼎の湧く樣な騷ぎになつてしまひました。

その後尊氏は直義の眞似をして吉野の朝廷に歸順し、南北兩朝は合體して一つに成

る様に、お願ひしました所、先に直義が歸順を願つた時にも、舌の根の乾かぬ中に、前言を翻したのですから、此度も亦僞て申すことゝ、中々お許しにならなかつたのですが、朝廷では何事か大いに畫策せらるゝ所があつたのでせう。

十月二十六日、忠雲僧正は吉野朝廷のお使となつて、京都に入り、尊氏、義詮父子の罪をお免しになり、之と同時に直義追討の綸旨を尊氏に賜ひました。

〔二〕尊氏、直義を毒殺す

尊氏や義詮の吉野朝廷への降伏は、申すまでもなく、彼等に取つて一つの便宜上の謀でありまして、全く直義追討の綸旨を戴くための、方便手段に外ならなかつたのであります。

吉野の朝廷でも、尊氏のこの位の眞意のお解りにならぬ筈はありません。

表面には尊氏の願ひを許して置いて、其の陰では大いに官軍の勢力を挽回すべき方法を、廻らさうとせられたのであります。

其の方法と申すのは東西同時に兵を動かして、尊氏を關東に討ち、義詮を京都に攻めて、二つに分れてゐる武家の勢力を、根底から打碎いてしまはうと、なされたのでありました。

尊氏は今や漸く歸順が適ひましたので、早速直義追討の綸旨を奉じて、東征する旨を諸國に命令して、十一月京都を出發しました。

當時直義は、本陣を伊豆の國府に置いて居りましたが、尊氏の軍を駿河の薩埵山に迎えて之と戰ひ、中々勝敗は決しませんでした。然し其後尊氏方に味方する部將が漸く多くなつて來ましたので、遂に直義も支えかねて、伊豆の北條に遁れてしまひました。

其後尊氏は直義と和睦して、正平七年正月五日には、二人共仲良く鎌倉に入りまし

たが、遂に尊氏は二月の二十六日、鎌倉淨明寺境内の延福寺で直義を毒殺してしまひました。

思へば兄の尊氏が武家政治を布くために、鎌倉に背いて以來、常に軍事に、政治に兄を補けては、非凡の手腕を揮ひ目的のためには手段を選ばず、遂には護良親王や恒良親王を弑し奉つた彼逆臣直義も、遂に四十五歳を一期として哀れ果敢ない最後を遂げてしまひました。彼も亦、天罰遂に免かるゝ事が出來なかつたのであります。

〔三〕宗良親王小手指原に士氣を皷舞し給ふ

吉野朝廷の檄によつて、暫く鳴を靜めて居りました關東の勤王の武士達は、時こそ至れりと、果然猛烈な活動を開始しました。

新田義興、同義宗、脇屋義助は共に上野國に蹶起して、閏二月十五日、世良田長樂寺に陣を布き翌日所在の兇徒を擊破し更に進んで忽に武藏を平定して、正平七年閏二月には鎌倉に討入りました。

然し間もなく義宗は尊氏のために追はれて、武藏の小手差原に退きました。

この時信濃國に在しました宗良親王には直義黨である諏訪の祝人を率ゐて、信濃より上野に出で、更に懸軍長驅、武藏に進まれて、小手差原、入間川等に於ては、大いに義宗を助けられて、御奮戰になりました。

君がため世のため何か惜しからん
　　捨てゝかひある命なりせば。

とは、親王が終始陣頭に立つて、士氣を皷舞せられた時の御歌であります。

然しながら此度も亦武運拙く、遂に義宗は仁木頼章のために破られ、親王は信濃に、義宗は越後に退き、義興、義治も亦鎌倉を捨てねばならなくなつてしまひました。

宗良親王は後醍醐天皇の第二の皇子にまして、元弘の始めから御父君の御意志を

奉戴遊ばされ、終始皇家中興の大業建設の第一線に御活躍遊ばされて、鞍馬幾年か南北の道に彷徨れては、尊い御生涯をお捧げになつた方であります。

李花集、新葉和歌集を繙けば、南船北馬、全く席暖かならざる親王の御活躍の御有様を拝察することが出來るのであります。

〔四〕後村上天皇、男山八幡に行幸あらせらる

斯くて關東は尊氏のために征服せられましたが、京都に於ける幕府の形勢は一日〳〵と悪くなつてきまして、留守居役の義詮は、戰々兢々たる有様になりました。

正平七年二月五日、京都御還幸の儀を仰せ出された後村上天皇は、三月二十六日、既に賀名生の行宮を御發輦になり、大和五條の野の宮へ行幸遊ばされ、翌日は楠木正儀以下楠木氏の一族が、萬歳を歡呼して御迎え申上げる中を、御氣嫌麗はしく東條城にお入りになり士卒を御閲兵になりまして、士氣を鼓舞せられました。

其の御行程は、元弘三年の後醍醐天皇が伯耆より御還幸の儀に準じられたのでありました。

やがて天皇には楠木正儀以下をお隨えになりまして、威風堂々と八幡男山に御臨幸になりました。

北畠顯能は三千餘騎にて、眞先に伏見、烏羽の方面から、楠木正儀、和田、越智、眞木、神宮寺の一隊五千餘騎は桂川方面から、千種顯經は五百餘騎にて、山城、丹波の唐櫃越から京都に亂入しました。

此時に於ける楠木軍の活躍は最も目覺しいものでありまして、賊の老將、細川顯氏を七條大宮に擊ち、楯を以て梯を作り屋根に登つては亂射して、賊を斃すこと數知れません。

顯氏は僅に身を以て京都の西北に逃れると云ふ始末で、正儀は馬に鞭打つて敵陣に

突入し、賊の猛將細川頼春を斬つてしまひました。

義詮は遂に京都を支えることが出來ずして、部下の佐々木、土岐等と共に、近江に走つてしまひました。京都の町は一朝にして官軍の領有する所となつて、久しき念願であつた京都の回復は茲に成し遂げられたのであります。

そこで吉野の朝廷では、北方の光嚴、光明、崇光の三上皇を持明院殿より六條殿に迎え次で八幡に遷し奉り、三月には河内東條に、更に六月には賀名生にお遷し申しました。

それに續いて北方にお仕へ申した公卿達も全部御供申上げましたから、日頃は淋しい賀名生の山中も、花の如くに賑かになつて、如何なる辻堂でも、溫室でも、風呂まで幔幕引かぬ所もない位賑かになりました。

吉野の朝廷では、京都を占領する近畿官軍の活躍を中心として、東に於ける宗良親王の御活動と、西九州に於ける懐良親王の御活動とを、恰も鳥の兩翼、車の兩輪として、一大活躍を促されたのでありますが、不幸にして東國の官軍は尊氏のために討破られ、九州の官軍も未だ京都に到る時機に到達しませんので、自然折角の京都の占領も、如何にも其の土臺が弱く、まるで砂上に築いた樓閣の樣な感じがないでもありませんでした。

北畠親房卿と、同顯能卿とは、京都に入つて警備の任に就かれましたが、どうも力が足りません。

獨り楠木正儀だけは、四條隆資卿の下に楠木氏一族を糾合して八幡の城に立籠り、後村上天皇を擁護し奉つて、輕々しく動かず、靜かに攻守の謀に秘策を廻らして居つた正儀の態度は、實に楠木黨の首腦として、將又吉野朝廷の支持者としての立派な見上げたものでありました。

第一六篇　八幡の激戰

〔一〕義詮、八幡に押寄す

京都を逃れて近江に走つた義詮は、近江の或る寺院に居りましたけれ共、土岐や佐々木の外は相從ふ軍勢も有りませんでした。

所が一度東國の合戰に尊氏が勝つたといふ報が聞えますと、諸國の軍勢が來るは〳〵、忽の中に雲霞のやうな大軍になつてしまひました。

そこで愈々京都へ押寄せるといふ事になつて、琵琶湖の上を、瀨田、矢步瀨の渡船に棹す者もあれば、或は堅田、高島を經て駒に鞭打つ者もあるといふ具合です。

三月十四日には既に京都に侵入して、神樂岡、眞如堂、將軍塚、長樂寺、阿彌陀峯等、東山一帶の地に兵を配置して、京都の市中を見下し、焚く篝火は炎々天を焦して其の猛勢は當る事が出來ません。

北畠顯能卿は一戰も交へないで淀、赤井に退き、橋を取拂つて防ぎましたが、賊の先鋒仁木義長の追擊する所となつて、またもや、八幡に逃れて山麓に陣を取りました。

義長は刄に血ぬらずして京都を奪還し、進んで東寺に陣して八幡城に相對しました。

八幡は非常に要害の場所であつて、三方を廻り流るゝ大きな川には、渡らうとしても船もなければ橋もなく、その上赤井の橋を取拂つて七千の官軍が楯籠つて居りますから、賊軍は如何にして之を攻めやうかと困つて居りましたが、其の中に細川顯氏は四國の軍勢三千餘騎を引連れて、京都に上つて參りますし、一時吉野朝廷に降つて居りました赤松律師則祐も亦京都へ馳せ付けて參りましたから、義詮は龍の水を得、虎

の山に據つたかの樣に喜びました。

八幡に立籠つた主力は、申すまでもなく楠木氏の一族でありまして、之に北畠顯能卿の軍勢も少々加はつて居りました。

北畠勢は大渡の方面を防ぎ、楠木氏の一族は後方の荒坂山、洞ケ峠方面に配置して、東條城との連絡を保ち、別に西方渡邊橋から神崎方面を警戒しました。

三月二十七日義詮は三萬餘騎の軍勢を引連れて、宇治の方面に出で、木津川を渡つて楠木氏の立籠つた洞ケ峠に攻め寄せてきました。

是は河内東條への通路を塞いで、官軍の糧道を斷たうとしたためです。

〔二〕和田五郎、土岐惡五郎を討つ

細川相模守清氏、細川陸奥守顯氏、土岐大膳大夫、舍弟の惡五郎等六千餘騎で押寄せましたが、山路嶮く、峯高く聳え立つて居りますから、麓からは皆馬を降りて、馬の手綱を取つては引連れ〳〵上つて來ました。

山上に居ります大和河内の者共は、元より斯樣な戰に馴れた者共ばかりですから、斯樣な戰に馴れた者共ばかりですから、岩の陰、岸の上を走り渡つては、矢を散々に浴せかけますので、矢面に立つた土岐と、細川の軍勢はどうしても進むことが出來ません。

土岐惡五郎は、其頃天下に名を知られた猛將で、打物取つての達人でありますから、卯花威の鎧に鍬形打つて、水色の笠印を吹流させ、五尺六寸の大太刀引拔いて、射向の袖を振簪しながら、遙に遠い山路を只一息に駈け上らうと、まるで猪の山でも上るかの樣に山上目懸けて馳せ上つて來ました。

之を見た和田五郎は、

『天晴れなる武者振りよ』

と、突たる楯をがばと投捨て、三尺五寸の小長刀を草短に取つて渡り合ひました。

此時細川清氏の郎從、關左近將監は土岐の脇よりつと走拔けて、和田五郎に打つてかゝりました。

此の樣子を見た和田の軍兵も亦小松の陰から走り出し、近々と寄せて、十二束三伏堅めて放つた矢は、關將監の空胴をくさめ通しに射拔いたものですから堪りません。

關將監は小膝を突いて伏してしまひました。

惡五郎が走り寄つて引起さうとした所を、和田の軍兵は亦もや二の矢を番へて、惡五郎の脇立の坪板目懸けて射込みました。

關將監は之を見て、今は助けてくれる人もないと思つたのでせうか、腰の刀を拔いて腹を切らうとしますと、惡五郎は、

『暫く〳〵、自害などをなさつてはいけません。今助けて差上げますから』

と、坪板に射立てられた矢を脇立から引切つて投捨て、打懸る敵を五六人切臥せ〳〵、關將監を左の小脇に抱へ込み、右の手には大太刀を打振り〳〵近附く敵を打拂つて、三町許り落延びました。

惡五郎の跡につゞいて何處までもと追ひ懸ける和田五郎も、

『討洩したか殘念！』

と思つた處へ、惡五郎の運が盡きたのでせうか、ひらりと飛んだ溝の岸の土の崩れたため、惡五郎が溝に落込んだ所を、長刀の柄を取り延べて、惡五郎の首は遂に和田五郎の手に討取られてしまひました。

〔三〕楠木勢の夜襲

惡五郎を討取つて官軍の勢は大いに振ましたけれども、賊の增援隊は陸續として四方から集りますのに、官軍の救援は少しもなく、其上糧食も漸く缺乏を告げて來ま

したから、今は官軍も已むを不得、兵を悉く八幡に集めて、徐々に戰線を縮少しました。

四月二十五日を期して、四方の賊軍は一齊に攻撃を開始しましたから、楠木、和田、湯淺の一隊は、陣を八幡山の西麓、佐羅科に移し、塹濠を隔てゝ眞木、葛葉の方面から襲撃する細川勢を拒いで、最も防戰に努めました。

北畠顯能卿は、伊賀伊勢の兵三千餘騎を引連れて、園殿口を防ぎました。

其の中に善法寺口方面に押寄せた赤松勢は火を放ちましたから、猛火は炎々と彼方にも此方にも起つて、人家、佛閣も皆燒き盡されて、戰は最も激しく、死傷は幾千人か數へきれません。

賊の主力は一旦兵を洞ヶ峠に引き上げましたが、翌日またもや四方から攻め寄せて來ました。

八幡山の山上では、畏くも天皇を奉じて山上の險岨に據り雨の如くに矢を浴せかけては、全軍よく力を協せて力闘しました。

この時細川清氏、顯氏の指揮する一隊は、八幡山の西の經塚の上に陣を取つて居りましたが、楠木勢の一隊は、この經塚に向つて、猛烈な夜襲を試みました。

先づ兵士一同に、同じ樣なる笠印をつけさせ、

『誰か』

と問へば、

『進む』

と答へる樣に、相言葉まで約束して夜の更くるのを待つて八百人の一隊は、咄と一時に切込みました。

細川の軍勢三千人、不意の夜襲に、暗さは暗し、馬は放れ、人は騷いで、太刀を拔くことも出來なければ、弓を引くことも出來ません。

傷手を受けて討たるる者は數を知らず、遙かの谷底へ人頽れをうつて追落されまし

た。

主將顯氏は、逸早く身を以て免れ、洞ケ峠の本營も亦大渡の方に潰走してしまひました。

〔四〕後村上天皇敵の重圍を突破し給ふ

三月の十五日から戰が始まつて、既に五十餘日になりましたから、八幡城内では全く兵糧も盡きて、其上援けの兵を待つ道もありません。

其中に五月十日になりますと、湯川の庄司はどうしたのか、三百人を引連れて賊軍に下つてしまひましたから、若しも城内の有樣を、敵に知らされたならば、其時こそ、落ちやうとしても落ちることは出來ないと、こゝに衆議一決して、五月十日の夜半、天皇を寮の御馬に乘せ參らせ、北畠顯能卿、名和長重等以下勇士三百人、天皇を守護し奉つて、敵の重圍を突破し大和南方の賀名生を指してお逃れになりました。

目に餘る數萬の賊軍は、主上の御前を横切り、或は跡を追ひ參らせんとしましたが、義に勇んで命を輕んずる官軍は、主上を落し參らするために、必死になつて防ぎ戰ひ、或は傷を被つて腹を切る者、又は踏止つて討死する者が三百人にも達しました。

就中元弘以來、先帝を始め、主上を補けまゐらせて、常に王事に盡した、四條隆資卿の戰死された事に就ては、如何に戰の激しかつたかといふ事を物語ると共に、天晴れ忠臣の最後に哀悼の涙を注がずには居られません。

天皇には軍勢を紛れさせらるゝために、山本判官が進め參らせました黄糸の御鎧を召して、栗毛の馬に跨つてゐらつしやいましたのを、賊の一宮彈正左衞門有種は、追懸參らせて、

『然るべき大將とこそ見參らせ候。

きたなくも敵に追立てられ、一度も返させ給はぬ者かな』

と呼はり懸つて、弓杖三杖ばかり近附きましたのを、法性寺左兵衛督は屹と顧みて、

『悪い奴原の言ひ様かな、手柄の程を見せてくれやう』

と馬より飛び降りて、四尺八寸の太刀を振りかざし、冑の鉢を滿身の力を込めて、破れよ、碎けよと、打叩きました。

さしもに強い一宮も後にどうと打据えられて、目はくれ、心も消えはてゝしまひましたから、暫く心を靜めやうと、目を塞いで居ります間に、天皇には遙に落ち延びさせられました。

木津川の端を西に傍て、御馬を早めさせらるゝ所に、備前の松田、備後の宮入道の兵共三百騎で取籠め奉り、四方八方より雲霞の如くに矢を浴せかけますから、到底お遁れになる事は出來ぬことゝ思はれましたが、天地神明の御加護もあつたのでせうか、御鎧の袖、草摺に二筋當りました矢も、中には通りませんで、玉體にはいとも恙なく奈良を經て、唐招提寺に御少憩遊ばされ、宇陀の水分にて楠木正儀等の御迎えを受けさせられて、遂に賀名生に還御遊ばされました。

正統の天子様が、九五の尊き御位を以てして、戎衣のまゝに或時は陣頭に立つて三軍を叱咤され、或時は軍卒に打交り給ふて、飛箭流矢のまに〳〵、荒れ果てた寒村離落を落ちさせ給ふた御有様は、實に聽くだけでも、誠に恐れ多い次第ではありませんか。

第一七篇　天野山と觀心寺の行宮

〔一〕京都の奪合

八幡の夜戰は不幸にして官軍が敗れましたために、吉野朝廷では、再び賀名生の黒木の御所に、吹く松風を友とせられました。

然し英主後村上天皇を始め奉り吉野朝の人々は、一敗や二敗を以て其志を屈するものではありません。

飽迄も足利幕府を倒して、後醍醐天皇の御理想を實現するといふことに努力せられました。

足利氏は直義が兄尊氏のために、鎌倉に毒殺されましてからは、この二人の爭ひは

一段落を告げたやうでありますが、桐の一葉落ちて天下の秋を知ると申す通り、既に其の一角が崩れ始めた足利氏の内部は決して元の姿に立還るものではありません。

天下の大勢は依然尊氏方と、直義方との二つに分れて、折にふれて縺れを生じ、その縺れは何時果つべしとも見えず、斯くて社會の狀態は、混亂に混亂を重ねていつたのであります。

此頃の足利方の武士達には少しも明瞭とした、己れの主義主張があつてその去就を定めたのではなく、只々自分の慾望を滿足せしめんために從軍したのでありました。

自分に都合のいひ間は足利方に從つてゐても、一旦利害相反すれば、忽ちに之を幣履の如くに捨て去つて、吉野朝のお味方をしたのです。

ですから彼等のお味方は、決して心からのお味方ではありません。

眞實に一時の方便であつたのです。

其の態度は吉野朝忠臣の人々に比べますれば、天と地との違ひがあります。

直義の歸順もさうでした。尊氏の歸順も亦さうでした。

それが彼等の部下同志が爭ふことになると、いよ〳〵烈しくなつて來たのです。

所でこの足利方の不平の武士共が、己の野心のために吉野の朝廷に歸順をお願ひに出る時、その機會を巧に御利用になつて、一意皇權恢復のために御奮鬪になつたのが、吉野朝廷の態度であつたのであります。

利によつて集つた足利氏の內部が、亂れに亂れて、常に內輪揉めの絕えなかつたといふ事は、實に微力なる吉野朝廷を、賀名生の奧に五十七年の間存續せしめたといふ、大きい一つの理由になるのであります。

直義の死んだ後、その地位に代つたのは、其の甥の直冬でした。

直冬は長門の探題でしたが、自分の力と賴んだ直義の死んだ後は、九州に於ての敵である一色範氏に對抗することが出來なくなりましたために、直義や尊氏に傲つて、一時官軍に歸順して其の力によつて一色範氏に當らうと考えました。

此頃山陰の豪族である、山名時氏の子の師義は、過ぐる八幡合戰の戰功によつて、若狹國の今富莊を貰ひたいと、佐々木道譽に賴みましたが、道譽は少しも取合ひませんでしたために、師義は怒つて伯耆に歸つて、父の時氏と共に足利氏に脅いてしまひました。

八幡の戰後、京畿の官軍は河內の東條を依然本據とせる、楠木正儀を中心とし、新に直義黨から歸順した、吉良滿貞、石塔賴房が相扶けて、京都進擊を計畫し、屢々京都を脅かしてゐたのでありました。

所が今や直冬や時氏が加はつて參りましたために、官軍の氣勢は更に高まつて參りましたから、正平八年六月官軍は一齊に京都に進擊して市中に火を放ち、義詮を近江に追ひ落してしまひました。

四條隆俊や山名時氏は京都を鎭めて、この捷報を後村上天皇に奏上いたしました。

斯うして一旦官軍の手に入つた京都も、官軍の基礎が不十分であり、之を統率する武將にも、立派の人が居りませんでしたから、義詮のために京都は二個月と立たない中に取り戻されて、折角の努力も水の泡になつてしまひました。

正平九年十月二十八日、後村上天皇は賀名生の行宮を御出發になつて、河内國天野山に行幸遊ばされ、金剛寺を以て行宮とせられました。

寺は眞言宗でありまして、金剛寺の金堂は當時の行宮の址であると、言ひ傳へられて居ります。

後村上天皇は極めて御英邁にましまして、豪氣であらせらるゝことは、皇考後醍醐天皇にも恥ぢ給ひません。

天位を讓つて、躬親ら千軍萬馬の間に往來し給はんとの御志がありましたために、賀名生の地は山深くして、皇運の恢復に便利でないといふお思召から、此に蹕を河内にお駐めになりまして攝河泉の平野を俯瞰し、赫々たる皇威を輝かさんと、遊ばされたのであります。

何と壯烈偉大なる御雄圖でございませう。

正平九年の春になりますと、尊氏は先に幕府に背いて足利直冬の味方をした、山名時氏を討つために、義詮を播磨に遣はさうとしました。

そこで時氏は直冬を主將として、尊氏に當らうとして、其の勅許を賀名生の行宮に請ひましたので、天皇は詔して、直冬を總追捕使となさいました。

この年の暮、山名時氏は但馬から、桃井直常や斯波高經は北國から、破竹の勢で京都に攻め上つて來ましたが、尊氏方の仁木頼章は、全然敗れてしまひましたために、尊氏はまたもや難を近江の武佐寺に避けました。

そうして暫くの間は、京都は官軍のものとなりましたが、之もほんの束の間で、京都恢復の計畫を立てた尊氏は、諸寺諸社に戰勝の祈禱を祈らしめて、尊氏は東近江より、義詮は西播磨より、京都を指して進擊して、淀、山崎、東山方面で大激戰が行は

れましたが、結局またもや官軍の不利となつて、總退却を始め、正平十年の三月には、官軍は僅かに八幡を保つのみとなりました。

〔二〕足利尊氏の死

前にも申しましたやうに、正平九年の四月には、吉野朝の一大柱石であつた北畠親房卿が薨ぜられまして、吉野朝の御威勢は次第〳〵に衰へて參りました。

然し此時に當つて、獨り皇軍のために萬丈の氣を吐きつゝあつたのは、九州に於ける征西將軍宮懐良親王の御活躍でありました。

九州に於ては、菊池武光の一族や、五條頼之等が宮樣を奉じて、賊軍と連年各地に戰つて居りましたが、正平十三年の春になりますと、賊の大友、少貳二氏は官軍に降り、一色範氏等は長門に走るといふ具合に、全九州を擧げて、殆ど官軍方となつたので、足利氏軍の勢力は全く地に墜てしまひました。

この敗報を受けた尊氏は非常に驚いて、斯くなつたからには最早部下などには、任せて置く譯にはゆかぬと、自身大兵を率ゐて出發しやうとして居りました。

所が未だ出發しない四月の十日頃から、尊氏は癰瘡といふ腫れ物に惱まされ、名醫の靈藥に、神佛の祈禱にと力を盡しましたが、更に其の效もなく、其の月の三十日、五十五歳を一期として、二條萬里小路の邸に歿しました。

思へば彼尊氏は源家の嫡流の家に生れ、相當に學問の修養もあり、人を容るゝ度量も有し、加ふるに鐵の如き剛き意志を以て居りましたが、只々祖先傳來の傳統的精神である、頼朝の武家政治を恢復して、再び源氏の世に復したいといふ、餘りにも強い念願から、遂に日本人としての道を誤り、其の生涯を叛逆の裡に終つたと云ふ事は實に彼のために悲しまねばなりません。

忝けなくも後醍醐天皇からは、身に餘る深い恩寵を蒙り、建武中興の恩賞は第一と

稱せらるゝ程、破格の御恩を蒙つたにも抱らず、後醍醐天皇を或は笠置に、或は吉野に、苦しめ奉つた上、天皇股肱の臣である、楠木氏の一族や、新田氏、名和氏等の忠誠無比の人々をして、悲慘な最後を遂げしめた、彼の罪は千載の下にも消ゆることはありますまい。

然し前にも述べました樣に、後醍醐天皇が吉野の奥に痛ましくも、崩御遊ばされた事を知つた時には、流石の尊氏も、深く悔恨の情に耐えずして、御百箇日には等持院に天皇の御冥福を祈るために、盛大な佛事を營み、また巨費を投じては、天龍寺を建立したのでありました。

之は全く彼が過去の罪業消滅のためであつたのであります。

遺骸は衣笠山の麓、等持院に葬りました。

〔三〕後村上天皇の崩御

尊氏の死後將軍となつた義詮は、吉野朝の衰運に乘じて、其の行在を攻めやうとして、弟足利基氏に兵を募らしめて、正平十四年の暮、義詮は自ら大軍を率ゐて、京都を發して攝津に向ひ、基氏の執事畠山國清は、河内の四條畷に陣して、官軍と戰端を開きました。

こゝに於て吉野朝の行宮では、大いに驚かれて、後村上天皇は難を河内國檜尾山觀心寺にお避けになりました。

これは楠木正儀や和田正武が、正成の眞似をして天皇を觀心寺にお遷し申すと共に、官軍は河内、和泉、紀伊の方面に於て防がうとしたのです。

然し紀伊の四條隆俊も、河内の官軍も至る所で敗北しましたために、賊軍は全部河